敷島町文化財調査報告　第19集
（山梨県）

松ノ尾遺跡 V

マンション建設工事に伴う
古墳・奈良・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

『松ノ尾遺跡　Ⅴ』敷島町文化財調査報告書　第19集　正誤表

頁・行	誤		正
P14の1行目	、北東側にも一部硬くなっ	⇒	、北西側にも一部硬くなっ
P14の12行目	転用硯10などもが出土しており、	⇒	転用硯10なども出土しており、
P23の16行目	4. 遺構外出土遺物（第29図、第4表、図版7－3～8）	⇒	4. 遺構外出土遺物（第29・30図、第4表、図版7－3～8）
P27の1行目	白磁水注の底部1点（第29図26の底部、	⇒	白磁水注の底部1点（第29図30の底部、

敷島町教育委員会　平成16年4月末日現在

敷島町文化財調査報告　第19集
（山梨県）

松ノ尾遺跡 V

マンション建設工事に伴う
古墳・奈良・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

序　　文

敷島町の南部は荒川によって形成された扇状地形を成し、平成５年におこなわれた『遺跡詳細分布調査』では、この地形上に多くの遺跡が分布していることが明らかとなりました。

近年、遺跡の多いこの扇状地上では、開発が頻繁におこなわれてきており、行政として埋蔵文化財の保護が急務となっています。

松ノ尾遺跡も例外ではなく、これまで道路建設、宅地分譲、大型店舗などの開発がおこなわれてきており、これに伴う調査を重ねてきた結果、今からおよそ1,300年前の古墳時代後期から約1,000年前の平安時代を中心とする大きな集落跡を形成していたことが徐々に明らかとなってきています。

今回報告する第Ⅴ次調査も、マンション建設に伴う記録保存のための調査でしたが、古墳時代の住居跡４軒、奈良時代の住居跡１軒、平安時代の住居跡６軒と土坑19基、ピット５ヶ所を確認することができ、長期にわたり人々がこの場所を好み選んで暮らしていたことを追認することができました。

町の財産である文化財を今後もなお一層調査・記録を精密に行い、永久に保存し後世に伝えていく中で、地域文化の発展と教育普及に役立てていく必要性を痛感します。

最後に、開発者山田久子氏の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成16年４月

敷島町教育委員会
教育長　山　口　正　智

例　言

1．本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町中下条地区に所在する松ノ尾遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、マンション建設に伴って実施した発掘調査で、調査面積は約250㎡である。
発掘調査から報告書刊行までの経費は、開発者である山田久子氏が負担した。

3．発掘調査は、平成12年（2000年）７月27日～平成12年８月28日までの20.5日間にわたって行った。
また、整理調査は平成15年（2003年）１月～平成16年（2004年）４月にかけて断続的に実施した。

4．調査組織は次のとおりである。

調査指導・主管	敷島町教育委員会
調査主体者	敷島町文化財調査会
調査事務局	敷島町文化財調査会
調査指導担当者	小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）

5．本書の執筆・編集および遺構・遺物の写真撮影は小坂隆司が担当した。
本書の執筆・編集にあたり大嶌正之（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係副主査）の協力を得た。

6．発掘調査と報告書作成にあたり、次の方々よりご教示を賜った。ここにご芳名を記し、感謝申し上げる。
（順不同、敬称略）
中込司朗、坂本美夫、羽中田壯雄、飯野正仁、畑　大介（敷島町文化財審議会）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）
萩原三雄（帝京大学山梨文化財研究所）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、八重樫忠郎（平泉町教育委員会）
大庭康時（福岡市教育委員会）、後藤和民（創価大学）、合田芳正（中央大学）、手塚直樹（青山学院大学）
室伏　徹（勝沼町教育委員会）、斎藤秀樹（南アルプス市教育委員会）

7．発掘調査ならびに整理作業参加者（敬称略）
青山制子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美、高添美智子、近浦正治、堤　吉彦、保坂広昭
保延　勇、望月典子、森沢篤美、関本芳子（敷島町協力員）、小沢伸吾、青海伸一、桜木雅紀（創価大学学生）

8．本遺跡の出土遺物および調査で得たすべての記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡　例

1．本書の第１図は、国土地理院発行の地形図（１：25,000）「甲府市北部」「韮崎」「甲府市」「小笠原」の各一部分を用いて作成したものである。

2．遺構挿図中、— — — —は硬化面の範囲、▒は焼土の範囲を表示した。

3．遺物挿図中、断面白抜きは土器、■は須恵器、▒は陶器類、▒は磁器類である。
また、土器表面の▒は丹彩、▒は黒彩を表し、▒は擦り面、▒は朱跡である。

4．図版中、遺構と遺物は縮尺が統一されていない。

本　文　目　次

序　文

例　言・凡　例

第１章　遺跡をとりまく環境

１．遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

２．周辺遺跡と歴史的背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２章　遺構と遺物

１．住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

２．土坑とピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

３．河道跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

４．遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

まとめ・・ 25

挿　図　目　次

第　1　図　松ノ尾遺跡と周辺の遺跡・・・・・・・・・・ 2
第　2　図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・ 5
第　3　図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・ 5
第　4　図　１号住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 6
第　5　図　１号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 7
第　6　図　２号住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 8
第　7　図　２号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 8
第　8　図　３号住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 9
第　9　図　３号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 9
第　10　図　４号住居跡とカマド・・・・・・・・・・・ 10
第　11　図　４号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 10
第　12　図　５号住居跡とカマド・・・・・・・・・・・ 11
第　13　図　５号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 12
第　14　図　６号住居跡とカマド・・・・・・・・・・・ 13
第　15　図　６号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 14
第　16　図　７号住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 15
第　17　図　７号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・・ 15
第　18　図　８号住居跡とカマド・・・・・・・・・・・ 16
第　19　図　８号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 16
第　20　図　９号住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 17
第　21　図　９号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 17
第　22　図　10号住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 18
第　23　図　10号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 18
第　24　図　11号住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 19
第　25　図　11号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・・ 19
第　26　図　調査区内土坑分布図・・・・・・・・・・・ 21
第　27　図　土坑（１）・・・・・・・・・・・・・ 21
第　28　図　土坑（２）・・・・・・・・・・・・・ 22
第　29　図　遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・・ 24
第　30　図　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・・ 25
第　31　図　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ次調査区概要図・・・・・・・ 26

表　目　次

第　1　表　住居跡出土遺物観察表（１）・・・・・・・ 19
第　2　表　住居跡出土遺物観察表（２）・・・・・・・ 20
第　3　表　土坑一覧・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第　4　表　遺構外出土遺物観察表・・・・・・・・・・・ 23

図　版　目　次

図版１－１　調査区全景
図版１－２　１号住居跡（南から）
図版１－３　１号住居跡（東から）
図版１－４　１号住居跡遺物出土状態（１）
図版１－５　１号住居跡遺物出土状態（２）
図版２－１　２号住居跡
図版２－２　３号住居跡
図版２－３　４号住居跡
図版２－４　４号住居跡カマド
図版２－５　５号住居跡
図版２－６　５号住居跡遺物出土状態
図版２－７　６号住居跡
図版２－８　６号住居跡遺物出土状態
図版３－１　６号住居跡
図版３－２　６号住居跡カマド
図版３－３　７号住居跡
図版３－４　７号住居跡カマド周辺
図版３－５　８号住居跡
図版３－６　８号住居跡遺物出土状態
図版３－７　９号住居跡
図版３－８　10号住居跡
図版４－１　調査区西側土坑群
図版４－２　１号土坑
図版４－３　２号土坑
図版４－４　３号土坑
図版４－５　４号土坑
図版５－１　５号土坑
図版５－２　８号土坑
図版５－３　11号土坑
図版５－４　15号土坑
図版５－５　17号土坑
図版５－６　19号土坑
図版５－７　旧河道跡（１）
図版５－８　旧河道跡（２）断面
図版６－１　１号住居跡出土遺物（１）
図版６－２　１号住居跡出土遺物（２）
図版６－３　２号住居跡出土遺物
図版６－４　３・４号住居跡出土遺物
図版６－５　５号住居跡出土遺物（１）
図版６－６　５号住居跡出土遺物（２）
図版６－７　６号住居跡出土遺物
図版６－８　７号住居跡出土遺物
図版７－１　８号住居跡出土遺物
図版７－２　９・10号住居跡出土遺物
図版７－３　縄文・古墳時代（前期）の土器
図版７－４　古墳時代（後期）
図版７－５　奈良・平安時代の土器・陶器
図版７－６　平安時代末葉の土器
図版７－７　須恵器・灰釉陶器・貿易陶磁器（白磁・青白磁）
図版７－８　遺構外石器

第１章　遺跡をとりまく環境

１．遺跡の立地と環境（第１図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するなだらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR 中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、盆地に向かって南向きに開口し、まるで天然の要害を形成するような特殊な地形を織り成している。

このうち荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約 17 km、東西約 4 km と南北に細長い町である。

本町は大きく北部の山間地帯と南部の盆地部におおよそ大別されるが、町域のほぼ 8～9 割は標高 1,704 m を測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形で、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように、甲府盆地北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成され、荒川右岸の本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

２．周辺遺跡と歴史的背景（第１図）

近年もっとも頻繁に発掘調査をおこなっている町南部の遺跡について時代ごとに概観していくこととする。代表的な遺跡は 9 遺跡が上げられる。

縄文時代　町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、人々が生活していた最も古い痕跡は縄文時代からである。これまで 11 軒の住居跡が発見されている。

代表的な遺跡には、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、金の尾遺跡⑧などが上げられる。

原腰遺跡はこの時期に稀な埋甕炉を有する縄文時代前期末の住居跡が 1 軒発見されている。

金の尾遺跡では、これまで 6 回の調査がおこなわれてきたが、1987 年の中央高速自動車道建設における第Ⅰ次調査で弥生時代の集落跡とともに縄文時代の住居跡計 8 軒（前期末 1 軒、中期 7 軒）が調査された。

松ノ尾遺跡の南部でも中期中葉にあたる住居跡 1 軒が確認されている（第Ⅲ次調査）が、もっとも濃密に該期の遺構・遺物が確認できるのは今のところ金の尾遺跡である。

弥生時代　金の尾遺跡があり、県内外を代表する大変重要な遺跡である。第Ⅰ次調査で弥生時代の住居跡 32 軒、方形・円形周溝墓 17 基をはじめ、集落跡を二分するとみられるＶ字の溝などが発見されており、県内で最も古い方形周溝墓群を有する弥生時代後期の集落遺跡として著名である。遺物をみると、中部高地系の土器と東海系統のものがともに出土していることから学術的にも貴重な資料を提供している。

近年の第Ⅳ次調査で、Ⅰ次調査で発見されたＶ字溝の延長を確認、発見された方形周溝墓には弥生時代後期のものをはじめとし、古墳時代前期、そして壺型埴輪を伴う古墳時代中期に該当する低墳丘墓も新たに確認された。1996 年の第Ⅵ次調査では集落を外周する長さ約 55 m におよぶ大溝（環濠跡）が出ている。

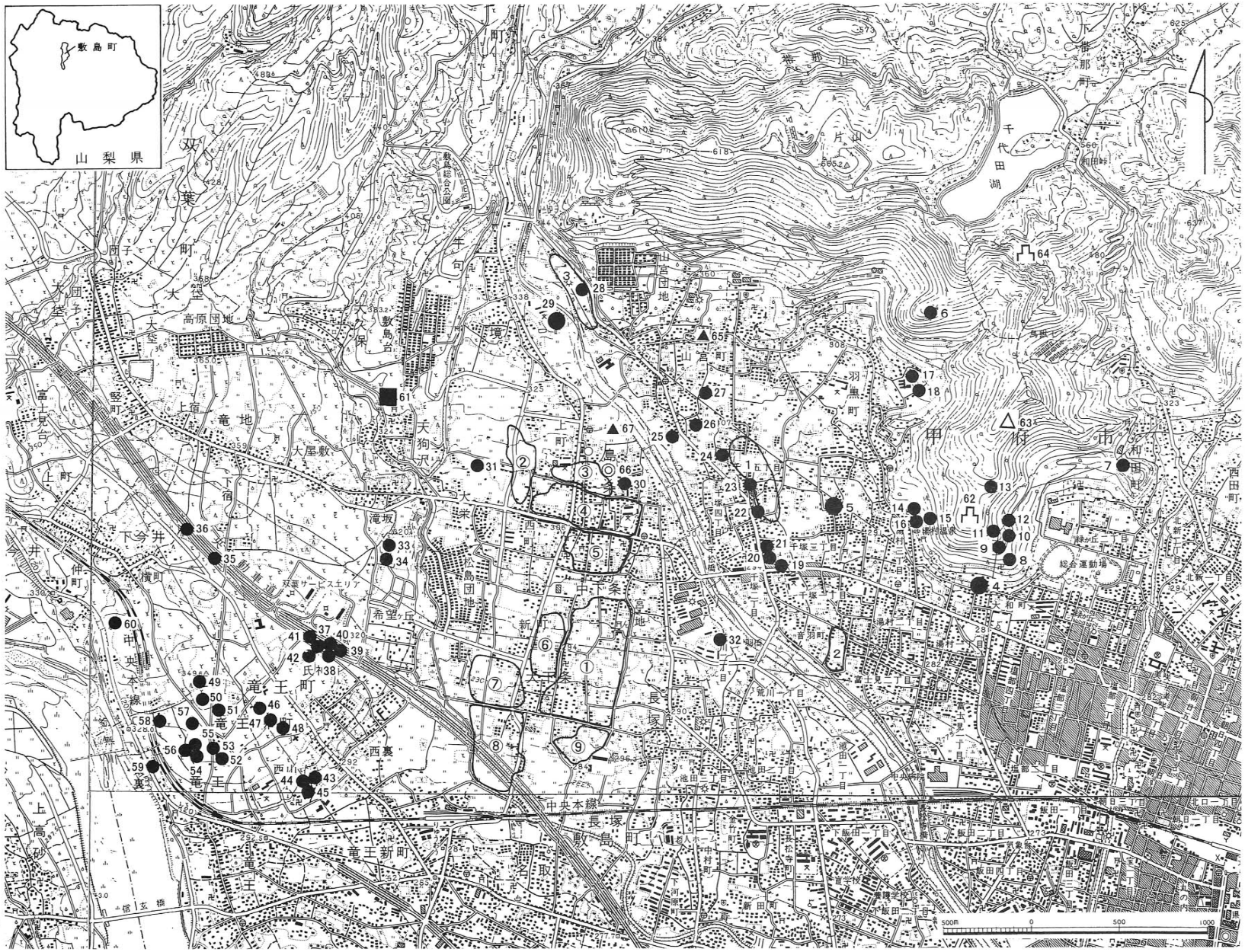
古墳時代　これまで 6 遺跡においてその存在が確認されている。

前期の遺跡は、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、三昧堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨などが上げられ、各遺跡ともＳ字状の台付甕、壺、高坏などが多く出土している。

御岳田遺跡（Ⅰ次）では調査区内の落ち込みから水晶の原石 8 点と水晶製丸玉の未製品 1 点が、末法遺跡

① 松ノ尾
② 原腰
③ 山宮地
④ 村続
⑤ 下動ノ木
⑥ 三昧堂
⑦ 御岳田
⑧ 金の尾
⑨ 末法

1 榎田
2 音羽
3 米草
4 万寿森古墳
5 加牟那塚古墳
6 おてんぐさん古墳
7 三光寺山古墳
8 湯村山１号古墳
9 湯村山２号古墳
10 湯村山３号古墳
11 湯村山４号古墳
12 湯村山５号古墳
13 湯村山６号古墳
14 大平１号古墳
15 大平２号古墳
16 塩沢寺裏無名墳
17 大塚古墳
18 無名塚古墳
19 薬師塚古墳
20 証文塚古墳
21 凧塚古墳
22 猪塚古墳
23 無名２号墳
24 子泣塚古墳
25 無名１号墳
26 天神塚古墳
27 天塚古墳
28 米草古墳
29 大塚古墳
30 大庭古墳
31 狐塚古墳（敷島町）
32 穴場古墳
33 双葉１号墳
34 往生塚古墳
35 双葉２号墳
36 狐塚古墳（双葉町）
37 竜王１号墳
38 竜王２号墳
39 竜王３号墳
40 二ツ塚１号墳
41 二ツ塚２号墳
42 へび塚
43 西山１号墳
44 西山２号墳
45 西山３号墳
46 狐塚１号墳
47 狐塚２号墳
48 狐塚３号墳
49 中秋塚
50 丸山古墳
51 四ツ石塚
52 形部塚１号墳
53 形部塚２号墳
54 両目塚１号墳
55 両目塚２号墳
56 両目塚３号墳
57 両目塚４号墳
58 両目塚５号墳
59 片瀬塚
60 双葉３号墳
61 天狗沢瓦窯
62 湯村山城
63 法泉寺山烽火台
64 和田城山
65 山之神遺跡（五輪塔１基）
66 土屋惣蔵昌恒館跡推定地
67 慈徳院五輪塔



第１図　松ノ尾遺跡と周辺の遺跡

（Ⅱ次）では１号住居跡から緑色凝灰岩質の石材で加工途中とみられる管玉１点と剥片類が出土し、周辺に該期の工房跡の存在が予測される。

金の尾遺跡（第Ⅳ・Ⅵ次調査）でも多くの遺物が出土しており、とくにⅣ次調査では本町で初めてとなる該期の周溝墓が２基確認されたことから、さらに周辺に新たな集落跡も今後発見される可能性が実に高い。

中期の遺跡は、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でそれぞれ住居跡１軒がある。

末法遺跡（Ⅰ次）では１号住居跡から甕、壺、高坏、坏などが出土し、しかも器種と量が充実している。金の尾遺跡（Ⅳ次）１号住居跡や御岳田遺跡（Ⅰ次）２号住居跡からも甕、甑、坏、高坏などがみられる。

その他、遺構は確認されていないが松ノ尾遺跡の第Ⅱ次調査では、該期の大型の有段高坏坏部２個体（口径約 25 cm、深さ約 5.0 cm)が出土している。周辺に該期の遺構・遺物が点在している可能性がある。

なお、金の尾Ⅳ次調査の周溝墓群には二重口縁をもつ「壺形埴輪」を出土したものが１基存在する。

後期の甲府盆地北西部は、６世紀中頃から横穴式石室を有する大型の後期古墳が築造されるようになる。

荒川左岸の甲府市湯村に位置する万寿森古墳(4)や県内で２番目の石室規模を誇る加牟那塚古墳(5)の存在などからこの頃本地域は県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、６世紀末～７世紀前半には町の南部を群集墳（千塚・山宮古墳群－甲府市、赤坂台古墳群－双葉・竜王など）が取り巻くようになる（第１図●印)。

敷島町内にも戦後間もない頃にはまだ４・５基の古墳が確認できたようであるが、現在では荒川右岸沿いに北から大塚古墳(29)と大庭古墳(30)が存在するのみとなっている。

また、松ノ尾遺跡の第Ⅰ・Ⅱ次調査ではおそらく荒川の氾濫によるとみられる大規模な流路跡が確認されており、これによって運ばれた土砂に相当すると考えられる包含層中から須恵器の瑕、金環、勾玉、ガラス玉、切子玉、臼玉、銅鏃、鉄鏃、鉄製刀子など古墳の副葬品とも思われるようなものが出土している。

当時の人々が暮らしていた集落跡は、本町内では現在のところ松ノ尾遺跡において非常に高い割合で発見されており、他では金の尾遺跡の第Ⅱ次調査で住居跡１軒が遺跡の北東端で唯一確認されているだけである。

松ノ尾遺跡は各次調査でこの時期の住居跡が常に発見されているが、周辺遺跡と比べても遺構・遺物が最も集中していることが窺える。第Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ次調査では住居跡が複雑に重複してみつかっており、とくに第Ⅱ次調査では一辺約７ｍ、第Ⅴ次調査で一辺約 8.5 ｍと約 8.0×6.0 ｍ、第Ⅶ次調査でも一辺約 7.7 ｍにもおよぶ大型の住居跡が発見されている。一方、荒川左岸の甲府市千塚に位置する榎田遺跡(1)でも古墳時代後期の住居跡が 12 軒発見され、規模が一辺約７ｍ四方を測る大型のものもみられる。集落内におけるこのような大型住居跡の存在について今後その位置付けを考慮していく必要性がある。

盆地北西部でのこうした勢力の繁栄を背景とし、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西に天狗沢瓦窯(61)が操業を開始するようになる。これは県内最古の瓦窯で、７世紀後半（白鳳期）とみられている。

この時期に併行する集落跡については、松ノ尾遺跡で近年徐々に住居跡が確認されてきており、また近隣では甲府市の榎田遺跡や音羽遺跡(2)で古墳時代後期～奈良時代に相当する住居跡が発見されている。

しかし、天狗沢瓦窯跡で焼かれ、その瓦が供給された寺院跡は残念ながらまだ発見されていないが、近年の調査で松ノ尾遺跡と村続遺跡④において瓦片が出土しており、今後更なる調査が期待される。

奈良・平安時代　該期の遺構は町内で現在もっとも数が多く、住居跡軒数だけでも総計 100 軒以上ある。

これまでの調査成果では、奈良時代から平安時代初め頃にかけては発見される遺構も未だ少ないが、平安時代中頃～末頃にかけては急激に遺構数も増加し該期の集落跡が主体を占めている傾向にある。

松ノ尾遺跡(1)は７回の調査でこれまでに住居跡 37 軒と竪穴状遺構 10 基が確認され、周辺の三昧堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でもその広がりと分布がみられる。

一方、町南部の北側では、原腰遺跡②、山宮地遺跡③などが上げられるほか村続遺跡④では調査面積は狭小であったが計 36 軒が確認され、詳細は今後の調査によるが大きな集落跡の様相を呈する。

この村続遺跡の南側には現在甲府から双葉へと横断する通称「山の手通り」が走っており、これは甲斐古道

9筋の内の1つにあたる道筋で旧「穂坂道」に相当する。本来茅ヶ岳の麓を経由して甲府の塩部から長野県佐久の川上までを結ぶ甲斐と信州を繋ぐ古道であった。

各遺跡出土の遺物をみると、膨大な量の土器をはじめとし須恵器、灰釉陶器、陶磁器類、また鍛冶関連遺物や鉄・銅製品なども出土している。中でも松ノ尾遺跡では墨書土器や円面硯(4個体分の破片)、そして銅製の帯金具や金銅製小仏像2躯が、また村続遺跡では銅製小仏像の台座が1躯出土していることなどが特筆される。銅製小仏像はその出土状態や共伴遺物、文様・鋳造技術などからおおよそ11～12世紀の所産とみられ、しかも現在県内の発掘調査で出土した4例のうち3例が本町で発見されたものとなっている。

一方、平安時代末頃になってくると青磁や白磁などの貿易陶磁器が出土する遺跡がみられるようになる。

中世　該期の明確な遺構が確認されているのは、松ノ尾遺跡①と山宮地遺跡③の2遺跡である。

松ノ尾遺跡は、第Ⅶ次調査において一辺約5.2 m、最深部約40 cmを測り、竪穴内に人為的に石が敷き並べられた竪穴状石組遺構が1基発見され、周辺からは土師質土器や青磁片などが出土し、おそらく平安末～中世初頭の遺構とみられる。また、この石組遺構の周辺にはピット群が展開し、この内近接したピットから仏像の頭部にみられる螺髪1点が出土しており、今後これらの遺構・遺物から遺跡の性格を十分に検討していく必要性がある。

山宮地遺跡では、近年15・16世紀代とみられる遺構や遺物が調査成果として上がっている。

第Ⅰ次調査ではカワラケや古銭などが出土した竪穴状遺構1基や土坑などがあり、さらに第Ⅱ次調査において竪穴状遺構4基、土坑14基が発見されている。とくに後者の2号竪穴状遺構からは全国でも初例とみられる17点の仏具を含んだ銅製品類が出土した。

山宮地遺跡の東脇には前述の穂坂道と南北に直行して南北朝時代に「御嶽道」が発達するが、この古道は修験道の霊場であった金峰山信仰の登山口であったようである。この「御嶽道」と遺跡との位置関係、そして銅製品の内容から「御岳信仰」とのかかわりも推測される。

さらに、第Ⅲ次調査ではカワラケと古銭が埋納された計32基にのぼる土壙墓群が検出され、本遺跡は極めて部分的な調査であるにもかかわらず中世遺構が広範囲に埋蔵されていることが明らかとなってきている。

本遺跡の東隣には御嶽道を挟んで調査の手がこれまで一切入ったことのない大庭遺跡があり「甲斐国志」古蹟部には字大庭に武田家の家臣であった「土屋惣蔵昌恒」屋敷跡(66)が存在したという記述がみられ、山宮地、大庭遺跡周辺のこの一帯は本町における該期の様相を考えていく上でも今後重要な地域であるといえよう。

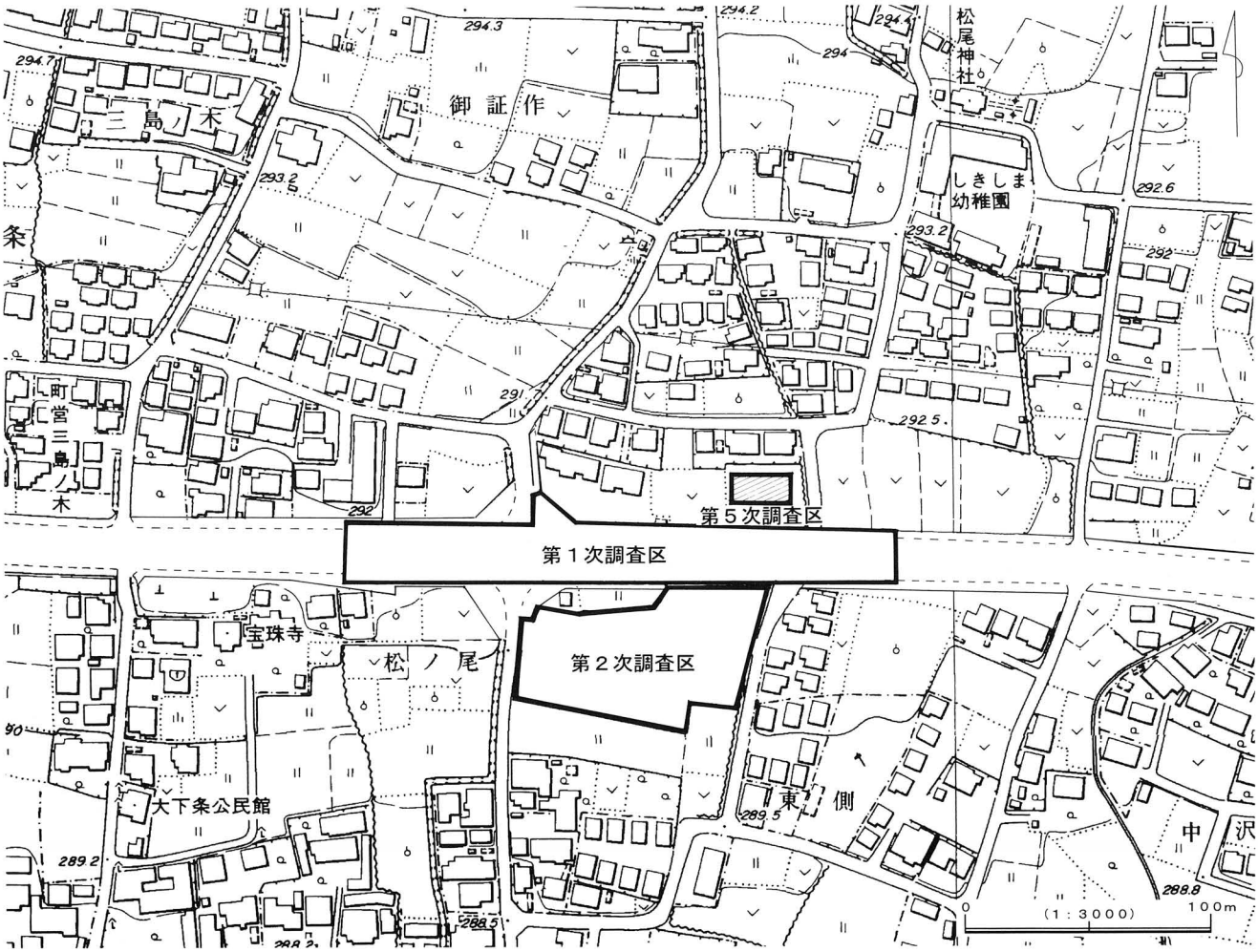
このように、近年の発掘調査ではこれまで判然としなかった中世の様相も徐々に明らかになりつつある。

明確な遺構はまだ判然としないが、これまで調査を行ってきた各遺跡では量的には僅少であるがカワラケや常滑、瀬戸・美濃などの陶器類、そして白磁、青磁などの貿易陶磁器などの出土が目立ってきており、今後盆地北西部地域における中世の様相を把握していくうえで注目される。

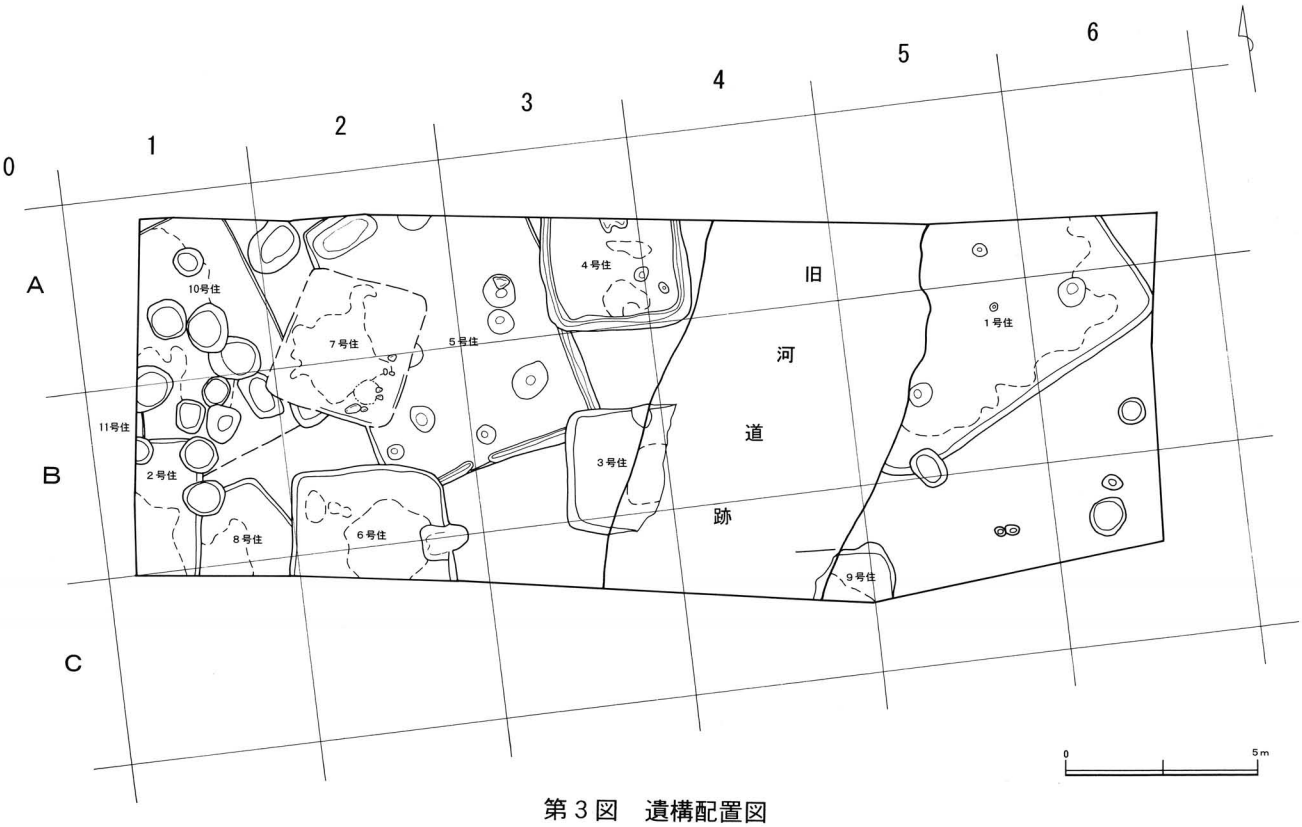
ほんの10年ほど前までは敷島町が所在する甲府盆地の北西部地域は調査の手がほとんど及ぶことがなかったことから、歴史の上では空白地帯ともなっていた。

しかし、以上にみてきたように町ではいまだに大規模な調査が数少ない状況であるにもかかわらず、内容の濃い成果が近年徐々に蓄積され始めてきている。

以下では、平成13年度におこなわれた松ノ尾遺跡第Ⅴ次調査の成果について報告していく。



第２図　調査区位置図



第３図　遺構配置図

第２章　遺構と遺物

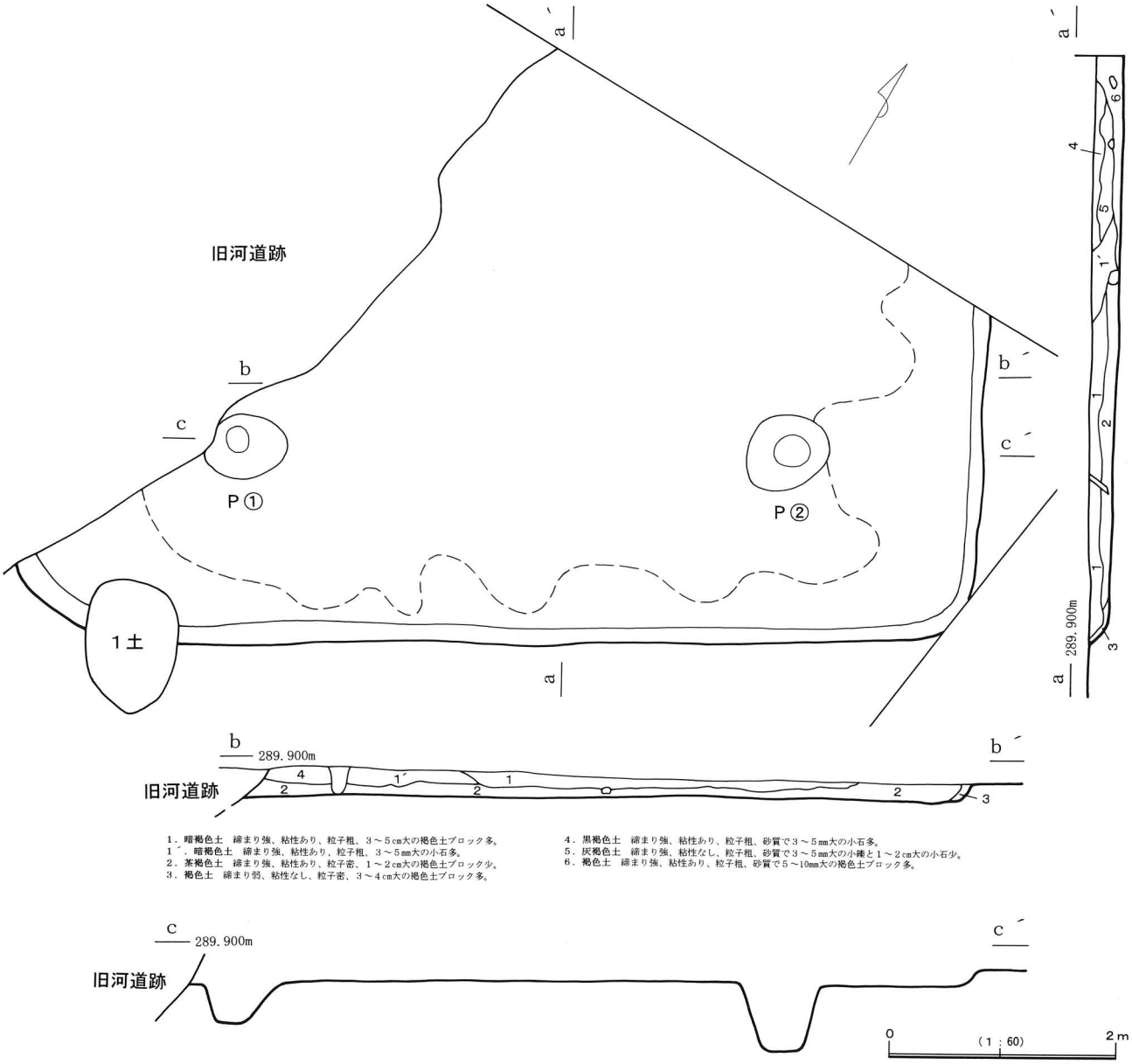
松ノ尾遺跡は、平成６年の都市計画街路の愛宕町下条線建設事業に伴いはじめて調査がおこなわれ、現在までに調査を重ねてきた結果、古墳時代～平安時代にかけての大規模な集落跡であることが明らかとなってきている。以下、第Ⅴ次の調査結果についてみていきたい。

１．住居跡

今回、住居跡は計 11 軒が確認され、古墳時代後期４軒、奈良時代１軒、平安時代６軒がある。

ａ．１号住居跡（第３～５図、第１表、図版１－２～５）

調査区の北東、Ａ－５・６、Ｂ－５・６に位置する。１号土坑とＰ－１・２によって切られている。また、住居跡の北側は調査区外となるが、西側には水害の跡とみられる河道跡が存在し、本住居跡はこの河道跡により大



第４図　１号住居跡

きく西半部を破壊されてしまっている。

規模は、東西約 8.6 m、確認可能な範囲で南北約 5.4 m あり、おそらく一辺約 8.5 m を測る方形の住居跡と思われる。壁高は約 18～22 cm を測り、外に向かって緩やかに立ち上がっている。

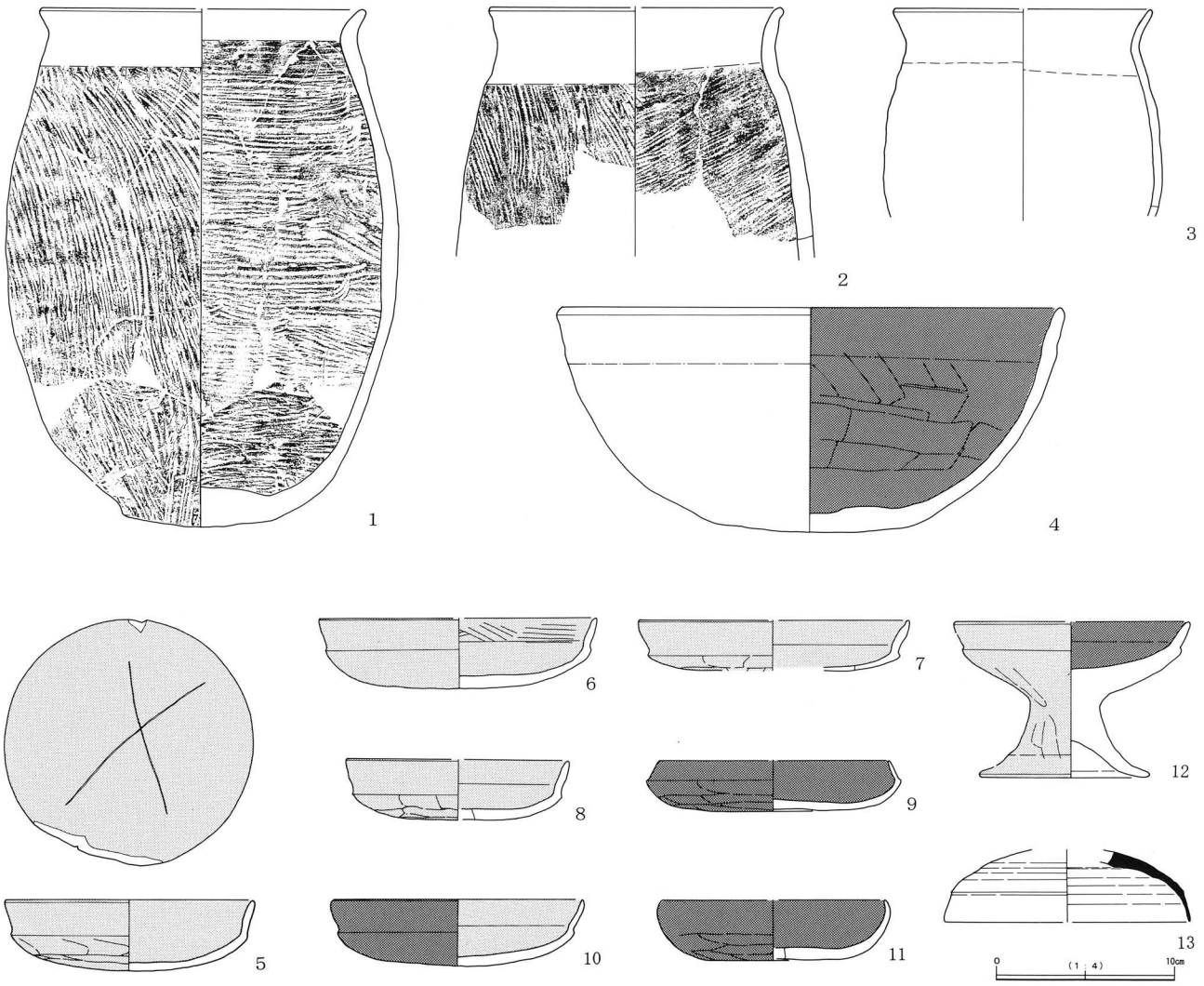
床面は全体的にほぼ水平であり、柱穴で囲まれた範囲内にとくに偏って硬くなった面を広範囲で確認することができた。柱穴は 2 ヶ所で確認され、P ①は、長軸約 70 cm、短軸約 62 cm、深さ約 35 cm、P ②は長軸約 80 cm、短軸約 70 cm、深さ約 60 cm を測る。両者は住居の南壁からほぼ一定の距離を置いて位置することから主柱穴であったことは間違いないであろう。

カマドは北または東側にあると思われるが、今回の調査では範囲外のようで確認できなかった。

遺物は主に長胴甕 1～3、大型の鉢 4、坏 5～11、高坏 12、須恵器蓋 13 などがある。

出土した遺物の大半は、住居跡の南側に偏在していた。甕 3 と坏 5～8・10・11 などは住居跡南壁際中央の周辺にまとまっており（図版 1－4・5)、坏 9 は南西隅部から出土した。高坏 12 は住居中央からやや南西部の床面上から出ている。長胴甕 1 は、今回確認された範囲内での住居中央からやや北東の床面上に横倒しとなって土圧で潰れた状態で発見された。そして、長胴甕 3 も甕 1 の周辺から出土している。須恵器蓋 13 は北側調査区寄りの住居中央からみつかった。

これらの遺物から本住居跡は古墳時代後期(6 世紀中頃～後半）に相当すると考えられる。



第 5 図　1 号住居跡出土遺物

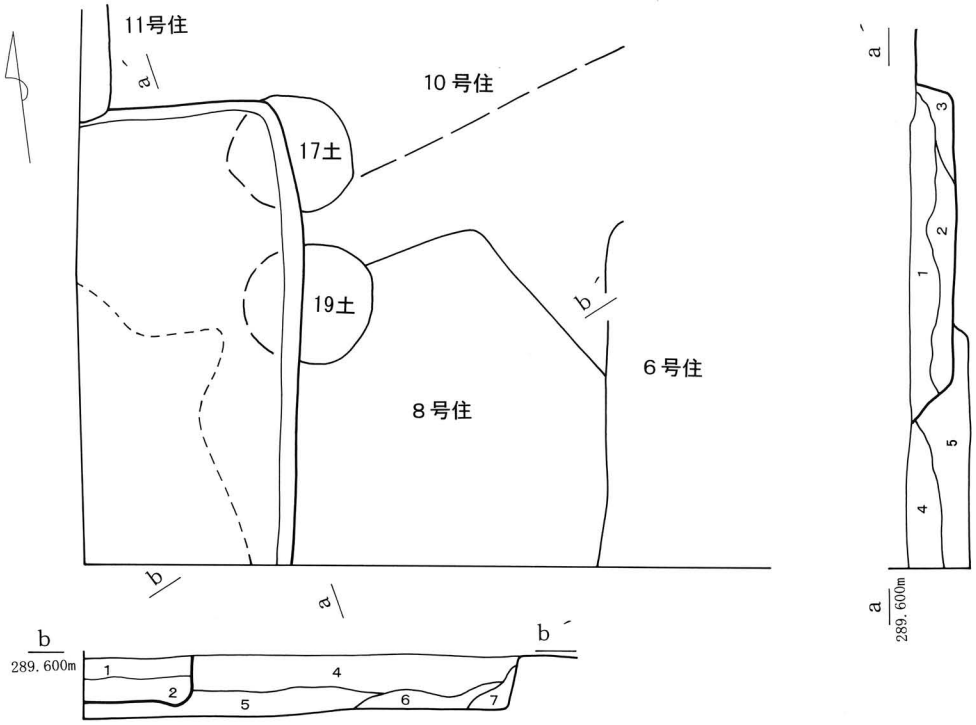
b．**2号住居跡**（第3・6・7図、第1表、図版2−1）

調査区の南西、B−1、C−1グリッドに位置する。住居跡の西側と南側は調査区外となっており、詳細は不明である。8・10・11号住居跡、2・17・19号土坑と重複関係にあり、この内8・10・11号住居跡を切り、2号土坑によって切られていた。調査では17・19号土坑との切り合い関係は判然としなかったが、両土坑内からの出土遺物が古墳時代後期のものに限られていることから本住居跡が17・19号の両土坑を切っているものと推測される。

規模は確認可能な範囲で東西約1.8 m、南北約3.7 mで、壁高約33 cmあり垂直に立ち上がる。

柱穴やカマド等の施設は確認できなかったが、土間状の硬く踏み締まった床面が観察された。

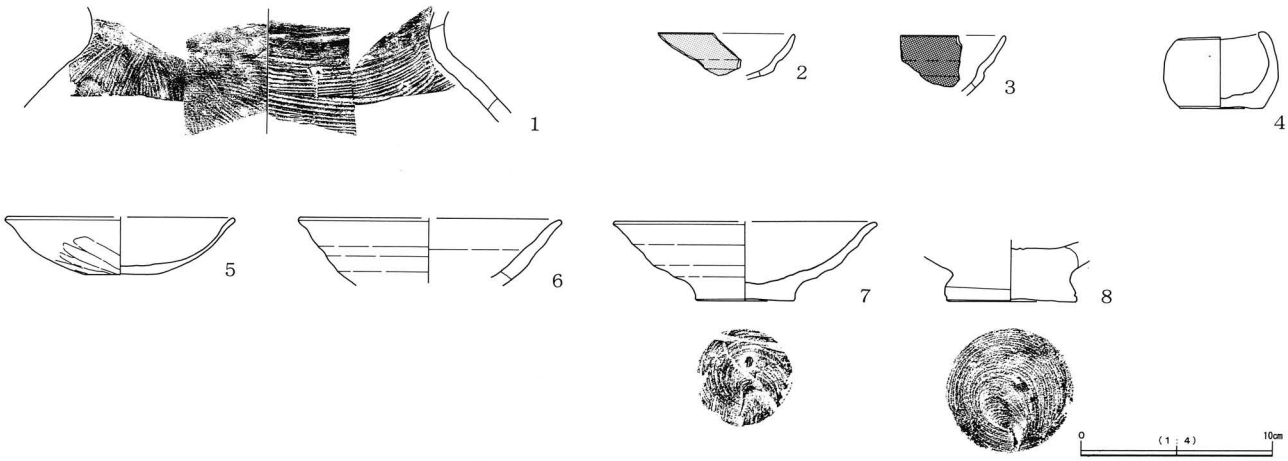
遺物は、古墳時代後期と平安時代(10〜12世紀）に属する甕、坏、手づくね等が出土している。この内、坏6・7と柱状高台坏8から本住居跡は12世紀代に相当するとみられる。



1．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、白色粒子多、2〜3mm大の焼土粒多、2〜3cm大の褐色土ブロック少。
2．茶褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、白色粒子少、焼土粒0.5mm大少。
3．黒褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、3〜5cm大の褐色土ブロック。焼土粒0.3〜0.5mm大少。
4．混褐色黒色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック2〜3cm大多、2〜3mm大の白色粒と焼土粒少。
5．黒褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、白色粒少、2〜3mm大の焼土粒少。
6．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、白色粒少、2〜5mm大の焼土粒多。
7．褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、3〜5cm大の褐色土ブロック多。

0　(1：60)　2m

第6図　2号住居跡



第7図　2号住居跡出土遺物

c．**3号住居跡**（第3・8・9図、第2表、図版2－2）

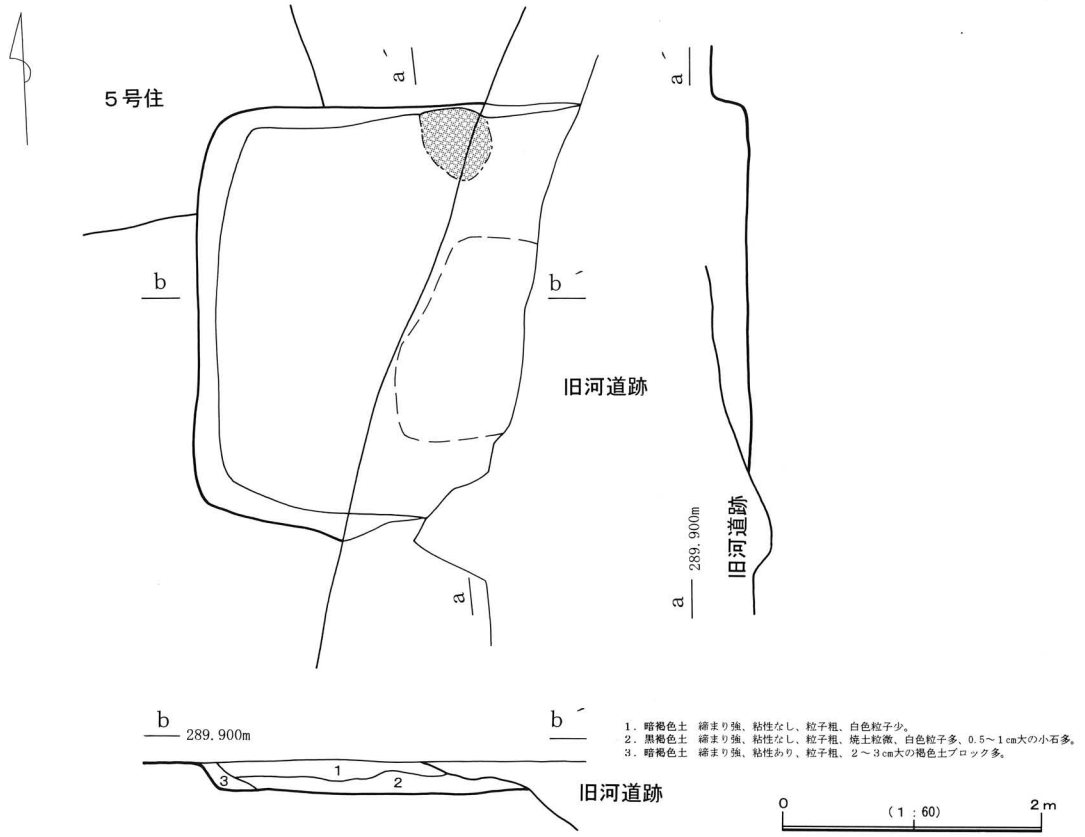
調査区中央のやや南寄り、B－3・4、C－3グリッドに位置する。5号住居跡の南東隅部を切っており、東側半部については旧河道跡によって大きく破壊されている。

規模は確認可能な範囲内で東西約2.9 m、南北約3.4 mで、本来一辺約3.4 mの方形を呈していたものと推測される。壁は深さ約20～25 cmを測り、緩やかに立ち上がる。

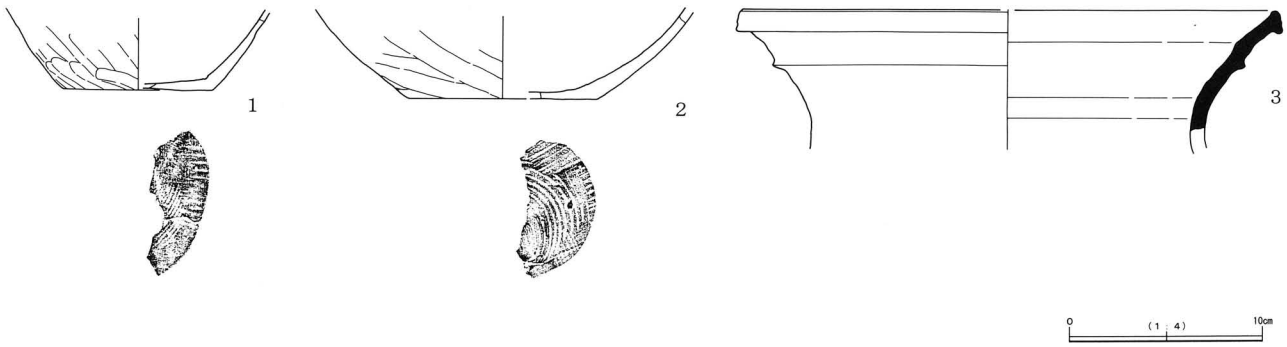
床面は地山の礫層の一部が露呈している箇所があり多少の凹凸はみられるものの、総体的にはほぼ水平で、しかも東側中央の旧河道跡によって破壊されている際から中心に土間状に硬くなった面が幸いにも良好に残っていた。

また、北壁中央のやや東寄りにはわずかに焼土の溜りとなった箇所が認められ、おそらく旧河道跡によって破壊されたカマド跡と考えられる。その他、柱穴等の施設は確認できなかった。

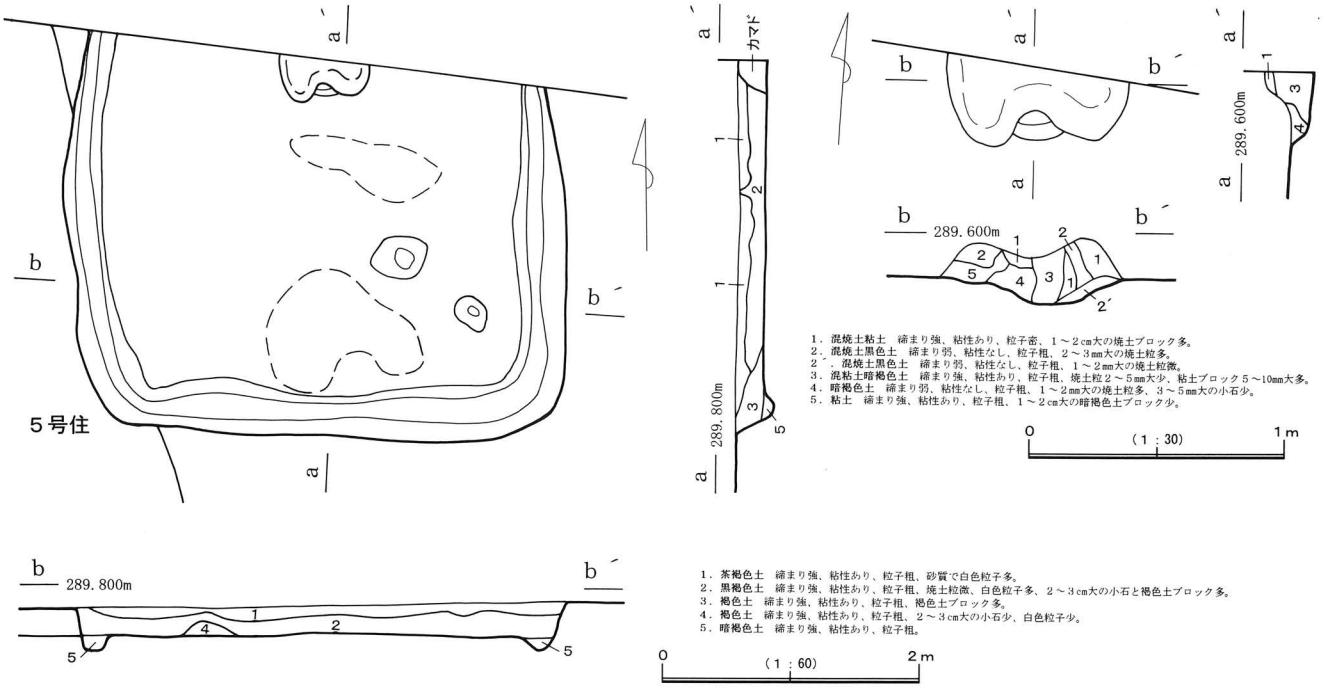
遺物は、破片を中心とする古墳時代後期、奈良・平安時代のものが出土し、中には旧河道跡により運ばれてきたようなものが住居東側を中心に存在する。各遺物の出土状況等を検討した結果、図化した坏1・2、須恵器甕3から平安時代10世紀代に属すると考えられる。



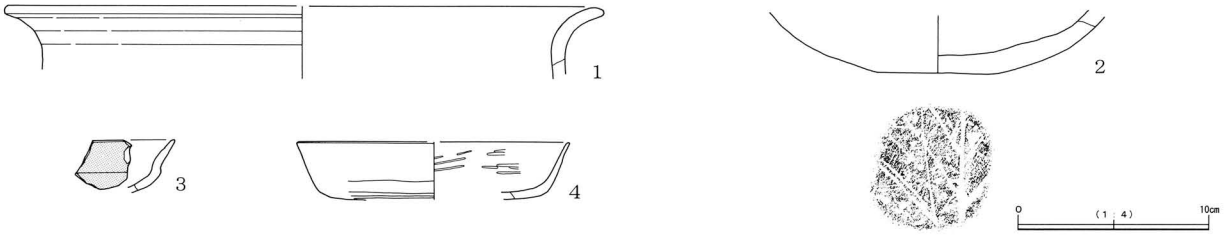
第8図　3号住居跡



第9図　3号住居跡出土遺物



第10図　4号住居跡とカマド



第11図　4号住居跡出土遺物

d．4号住居跡（第3・10・11図、第2表、図版2－3・4）

調査区の中央北側、A－3・4、B－3・4グリッドに位置する。住居跡の北側は調査区外で、南西部では5号住居跡と僅かに重複しており、本住居跡が5号住居跡を切っている。

規模は確認可能な範囲で東西約3.95 m、南北約3.1 mあり、本来一辺約4.0 mの方形を呈するとみられる。

ほぼ北壁中央では東西約70 cm、南北約35 cmの範囲で粘土を貼ったカマドが確認できた。また、カマド正面と南壁中央付近には土間状に踏み固まった面が残存するが、大方は礫層が露呈して凹凸のある床を呈している。

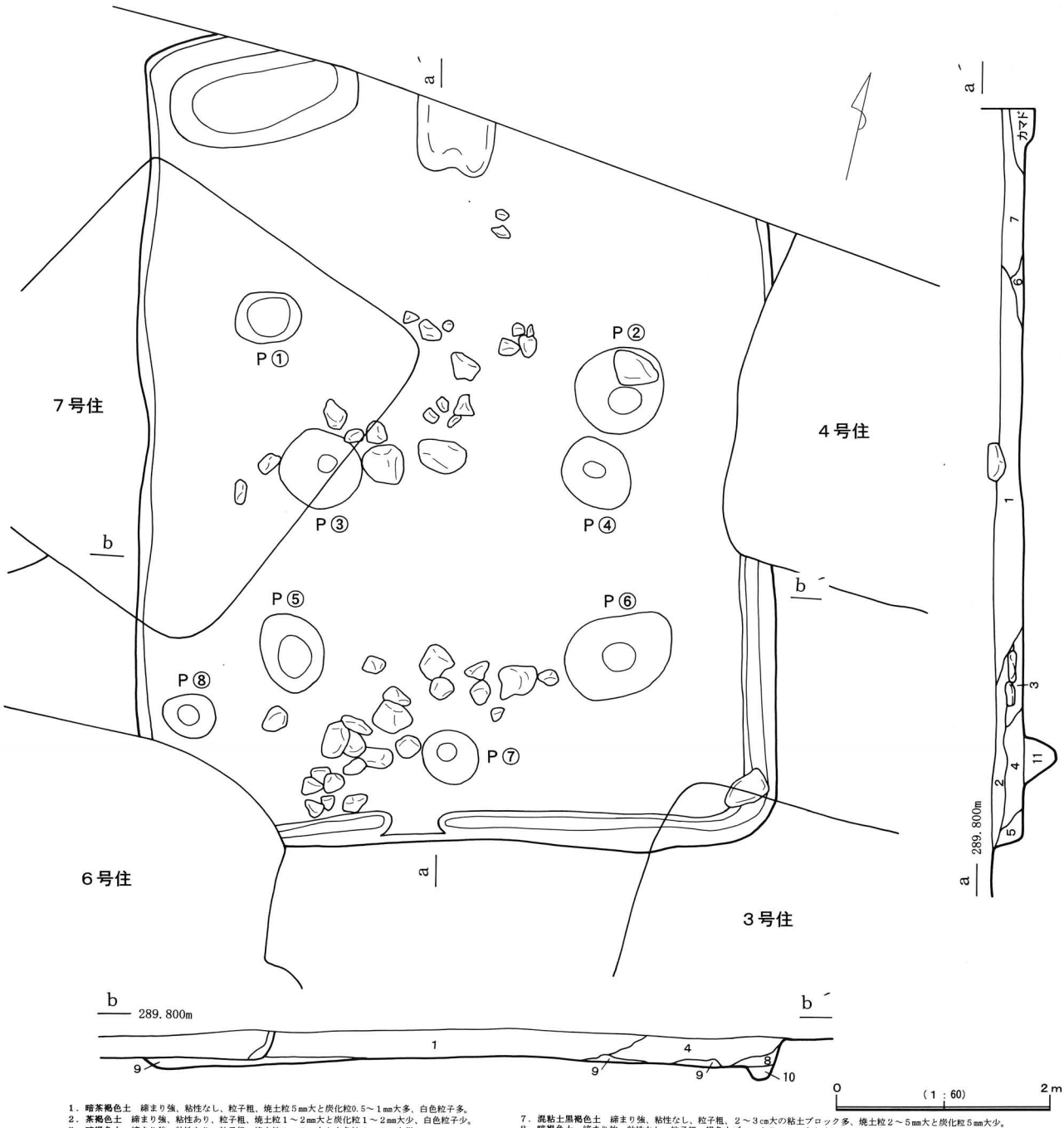
東西南側の壁際には、幅約20～35 cm、深さ約6～12 cmの壁溝が間断なく巡っていた。

遺物は、古墳時代後期から奈良時代の細片を中心に出土している。丁寧なミガキを施した坏4などの出土遺物から本住居跡の所属時期は奈良時代(8世紀代）に相当するものと考えられる。

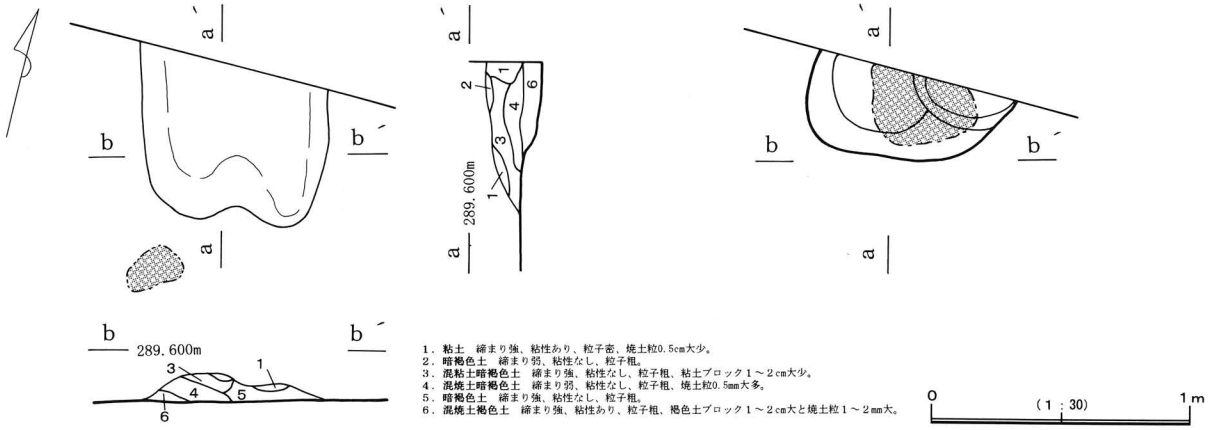
e．5号住居跡（第3・12・13図、第2表、図版2－5・6）

調査区の西側、A－2・3、B－2・3グリッドに位置する。本住居跡は奈良・平安時代の3・4・6・7号住居跡によって切られている。

規模は東西約6.0 m、南北約7.8 mを測り、形態は長方形を呈する。壁は深さ26～30 cmを測り、緩やかに外に向かって立ち上がっている。

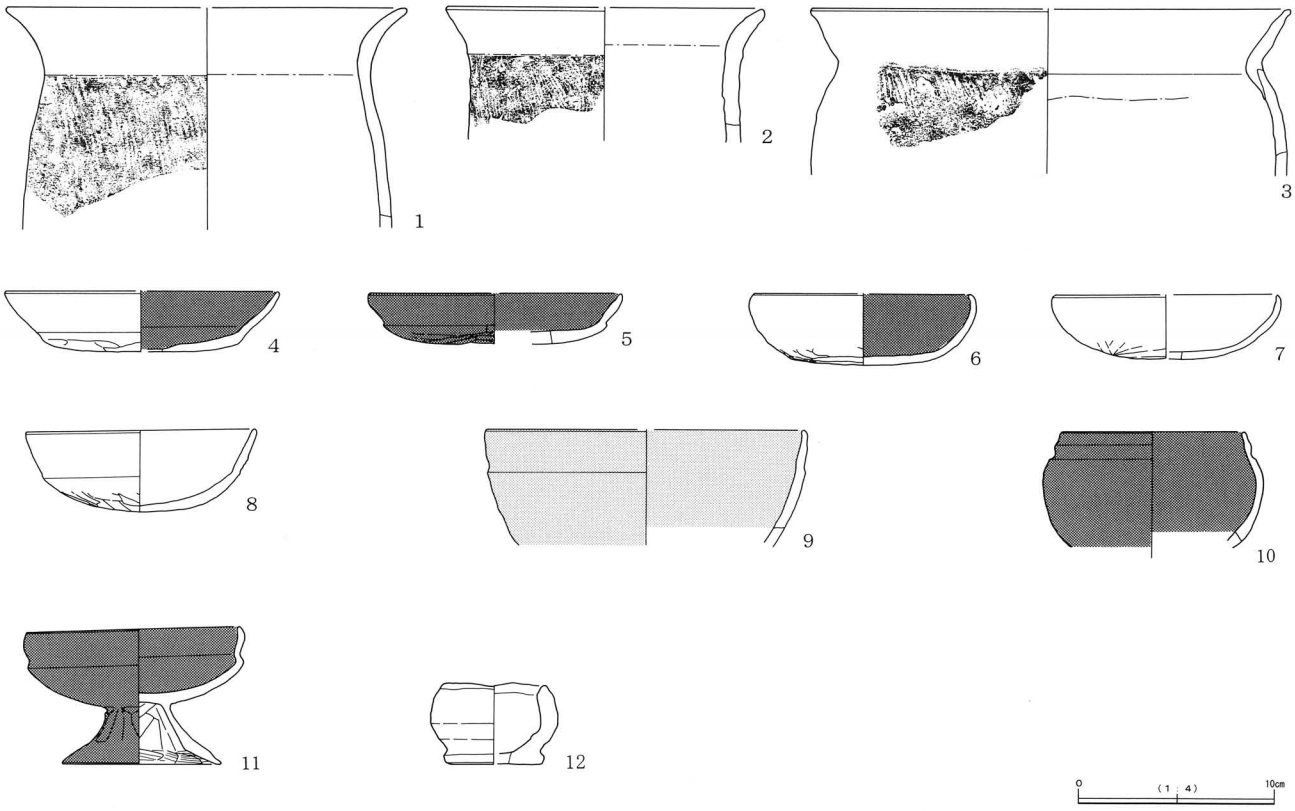


1．暗茶褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、焼土粒5mm大と炭化粒0.5～1mm大多、白色粒子多。
2．茶褐色土　締まり強、粘性あり、粒子粗、焼土粒1～2mm大と炭化粒1～2mm大少、白色粒子少。
3．暗褐色土　締まり強、粘性あり、粒子粗、焼土粒1～2mm大と白色粒1～2mm大微。
4．茶褐色土　締まり強、粘性なし、粒子密、焼土粒1～2mm大微。　。
5．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、1～2cm大の褐色土ブロック少。
6．混焼土褐色土　締まり弱、粘性あり、粒子密、焼土粒0.5～1mm大多。
7．混粘土黒褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、2～3cm大の粘土ブロック多、焼土粒2～5mm大と炭化粒5mm大少。
8．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック3～4cm大と小石2～3cm大少。
9．褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック3～4cm。
10．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、5～10mm大の褐色土ブロック少。
11．暗褐色土　締まり強、粘性あり、粒子粗、褐色土ブロック少。



1．粘土　締まり強、粘性あり、粒子密、焼土粒0.5cm大少。
2．暗褐色土　締まり弱、粘性なし、粒子粗。
3．混粘土暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、粘土ブロック1～2cm大少。
4．混焼土暗褐色土　締まり弱、粘性なし、粒子粗、焼土粒0.5mm大多。
5．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗。
6．混焼土褐色土　締まり強、粘性あり、粒子粗、褐色土ブロック1～2cm大と焼土粒1～2mm大。

第12図　5号住居跡とカマド



第 13 図　5 号住居跡出土遺物

床面は、今回発見された他の住居跡でみられるような硬く踏み締まった面はなかった。

覆土中から床面上には住居跡の中央とＰ⑦を中心とする南壁中央付近にかけて拳大から直径 45 cm 大前後に至る人頭大の石などが多く集中して出土している。

床面からは、計 8 ヶ所にピット（第 12 図Ｐ①～⑧)が確認された。Ｐ①は長軸約 65 cm、短軸約 50 cm、深さ約 12 cm、Ｐ②は直径約 90 cm、深さ約 32 cm、Ｐ③は約 75 cm、深さ約 47 cm、Ｐ④は長軸約 75 cm、短軸約 60 cm、深さ約 39 cm、Ｐ⑤は長軸約 78 cm、短軸約 60 cm、深さ約 22 cm、Ｐ⑥は長軸約 108 cm、短軸約 76 cm、深さ約 39 cm、Ｐ⑦は長軸約 50 cm、深さ約 33 cm、Ｐ⑧は長軸約 50 cm、短軸約 42 cm、深さ約 21 cm をそれぞれ測る。

この内屋根を支えていた主柱穴と考えられるものにはＰ⑤・⑥があり、また南壁中央付近にあるＰ⑦はその位置関係から出入り口ピットの可能性もある。

住居跡南東部と南側に限られた壁際には、幅約 20～35 cm、深さ約 15 cm の壁溝が巡っており、しかも、南壁の中央よりやや西側においてＰ－7 を意識するように部分的に断絶していた。

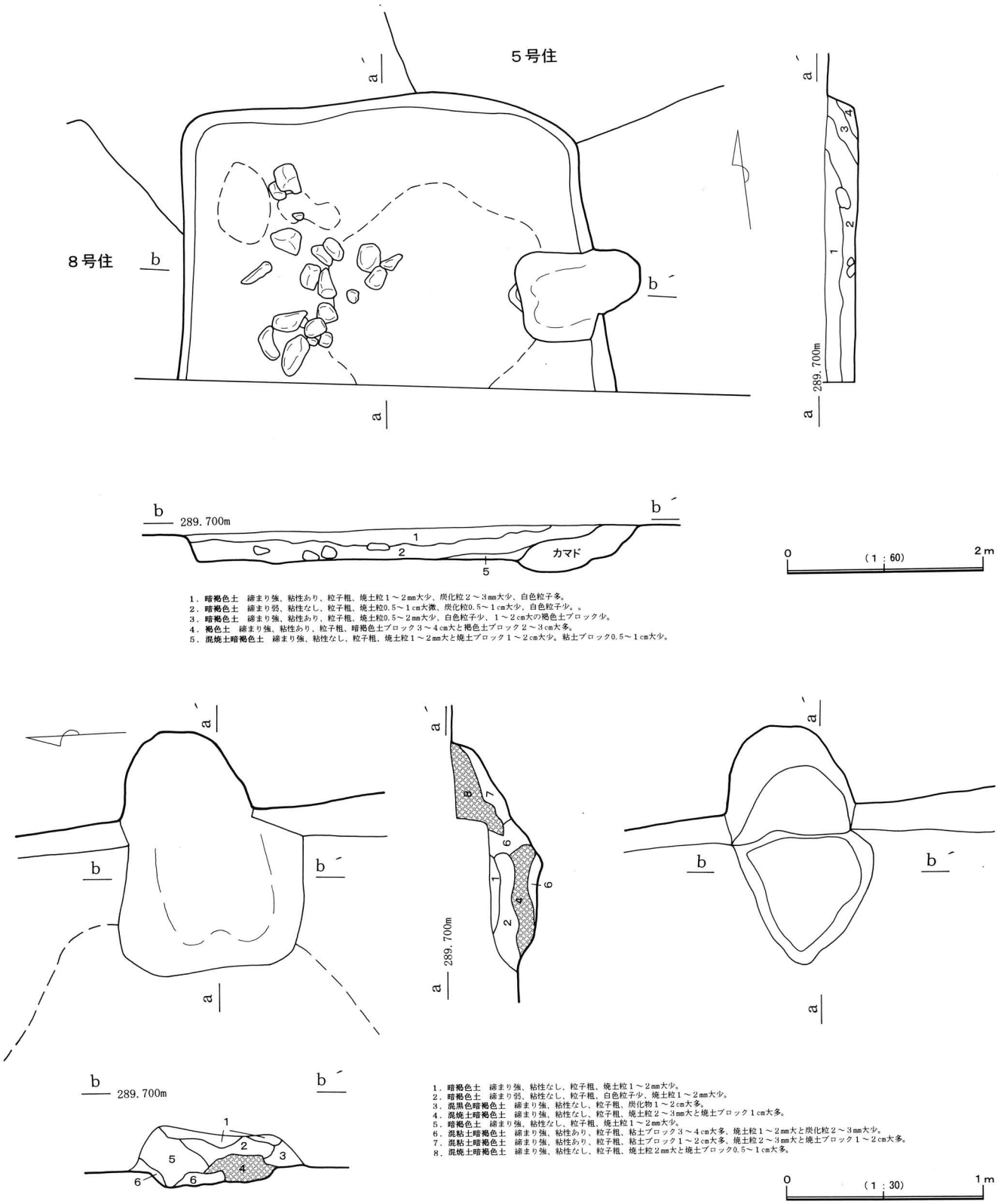
カマドは住居跡北側の中央にあり、東西約 74 cm、南北約 80 cm を測り、白色粘土を部分的に貼ったものであったが、遺存状態は良好でなく周辺に焼土がかなり散っており、袖石等のカマドの用材は認められなかった。

遺物は、長胴甕 1・2、球胴甕 3、坏 4～8、鉢 9・10、高坏 11、小型土器 12 などが出土しており、その内容から本住居跡は 6 世紀末～7 世紀初頭に所属するものと考えられる。

f．6号住居跡（第3・14・15図、第2表、図版2−7・8、3−1・2）

調査区の西側南部、B−1・2、C−1・2に位置している。住居跡の北東部では5号住居跡、南西部では8号住居跡をそれぞれ切っており、住居跡南側は調査区外となっている。

規模は、東西約4.5 m、確認可能な範囲内で南北約3.0 mあり、本来一辺4.5 mほどの方形を呈すると考えられる。壁は深さ28〜34 cmで、やや外側に向かって直線的に立ち上がっている。



第14図　6号住居跡とカマド

床面は、東カマドの正面から住居跡中央に向かって大きく硬く踏み締められており、北東側にも一部硬くなった面が散在している。

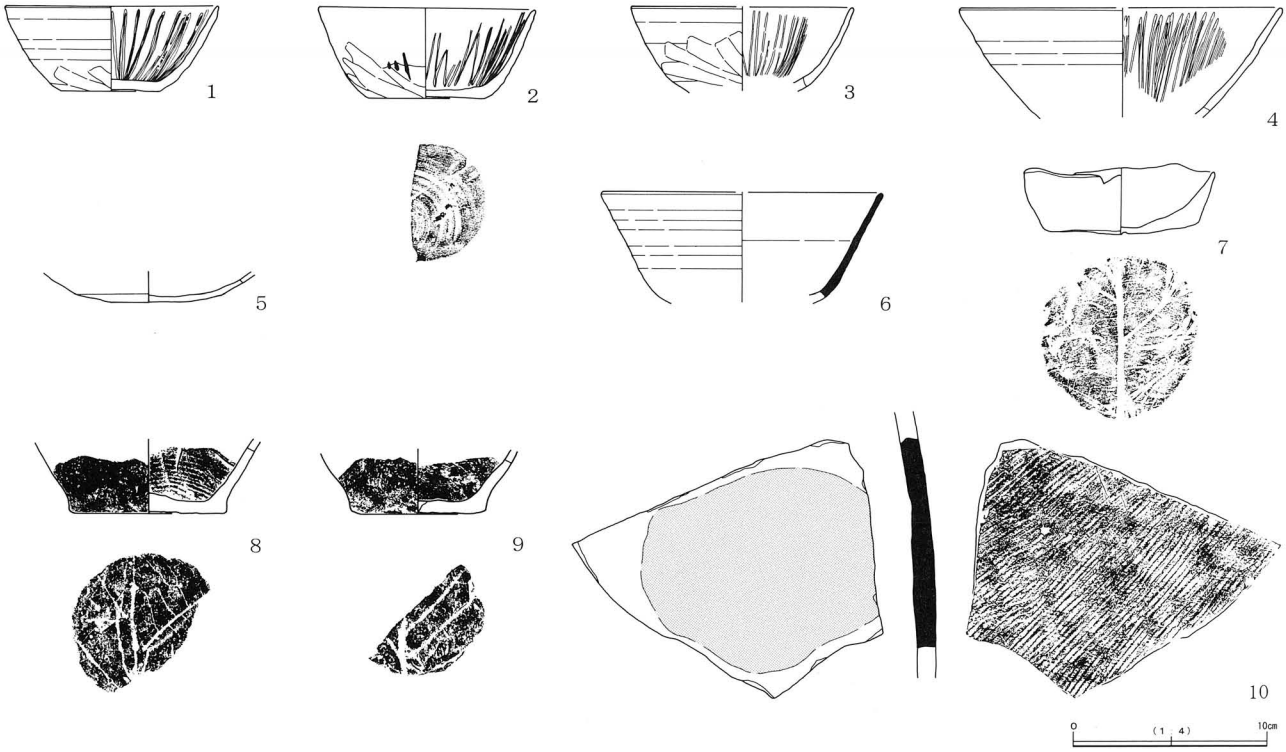
また住居跡西側の床面中央付近には拳大から約 45 cm ほどもある大きな石が床面上から覆土中にかけて集中して出土した。

カマドは、東壁のおそらく中央に位置しており、長軸約 1.5 m、短軸約 0.95 m を測る。断面観察から燃焼部と煙道部にあたるとみられる層が確認できるが、燃焼部にあたる範囲が幅狭く、煙道も外へと抜けて残ってはいないことから、本住居跡の埋没の過程で全体的に上から下へと力が加わって押し潰された状態になっているのであろう。袖石などの構築材は見当たらなかった。

遺物は、覆土上層から 10 世紀前半代の口縁部が玉縁となる土師器坏片や青白磁の皿片（遺構外遺物 29)などが混在していた。そして、下層中と床面上からは土師器坏 1～4、土師器皿 5、須恵器坏 6 などが出土している。土師器坏 2 の体部外面には「川」と記された墨書がみられる。

また、須恵器の大甕の破片を利用した転用硯 10 などもが出土しており、その中央には墨を擦ったとみられる面が残っている。

本住居跡の所属時期は下層内から出土した遺物の時期から、平安時代前半(9 世紀中頃）に属する。



第 15 図　6 号住居跡出土遺物

g．7号住居跡（第3・16・17図、第2表、図版3－3・4）

調査区の西側、A－2、B－1・2に位置し、5・10号住居跡と13・14・18号土坑を切る。

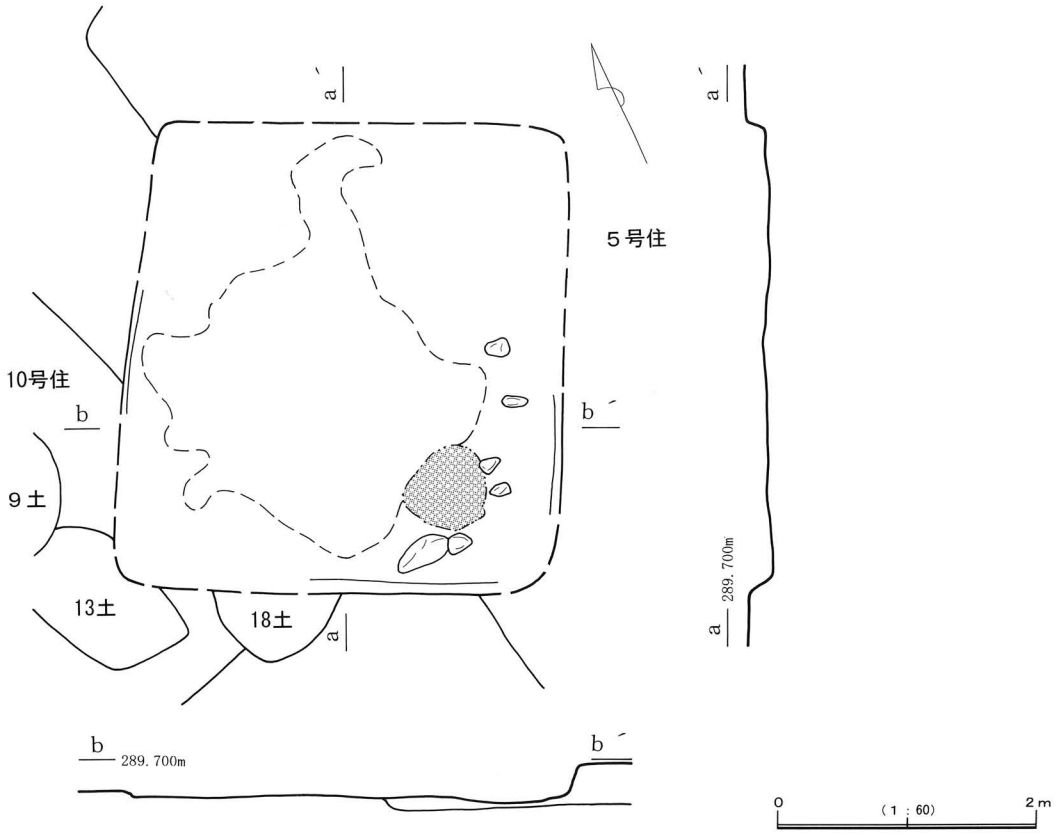
規模は、遺構の遺存状態が良好でなかったため僅かに残る壁と床面の状態から長軸約3.7 m、短軸約3.45 mの方形を呈するとみられ、最も状態の良い場所で壁の深さは約20 cmを測る。

住居跡南側隅には、長軸約70 cm、短軸約60 cmの楕円形状の範囲に僅かな焼土と主に灰が充満しており、しかも周囲に大型の石が据えられていたことから、この位置にカマドが設けられていたと考えられる。遺物もこの周辺を中心に出土している。

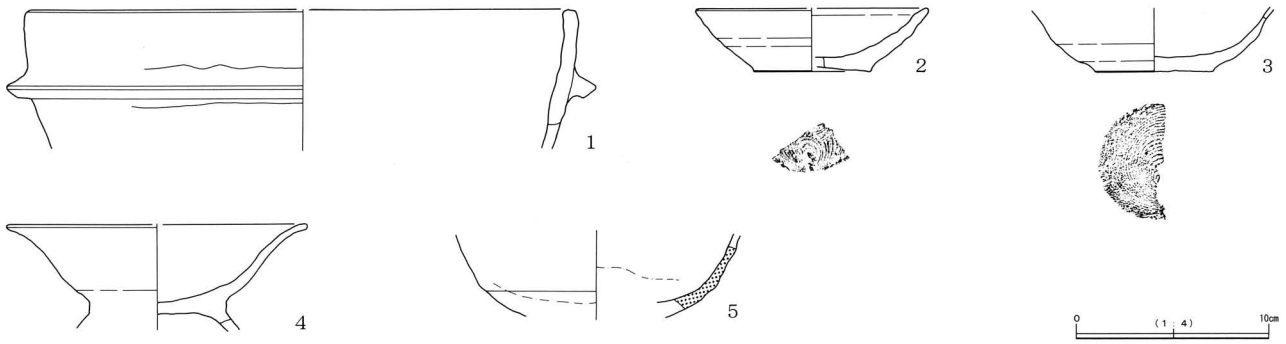
そして住居跡南隅から中央にかけて硬く踏み締められた床面が広い範囲で観察された。

遺物は、羽釜1、坏2・3、脚高高台坏4、灰釉陶器の碗5など土師質土器が中心に出土している（※白磁Ⅱ類の胴部片が覆土中から出土したが、極細片のため伴うか否か明らかでないため遺構外に掲載した）。

これらの遺物から、本住居跡の時期は平安時代後半(11世紀前半）に相当する。



第16図　7号住居跡



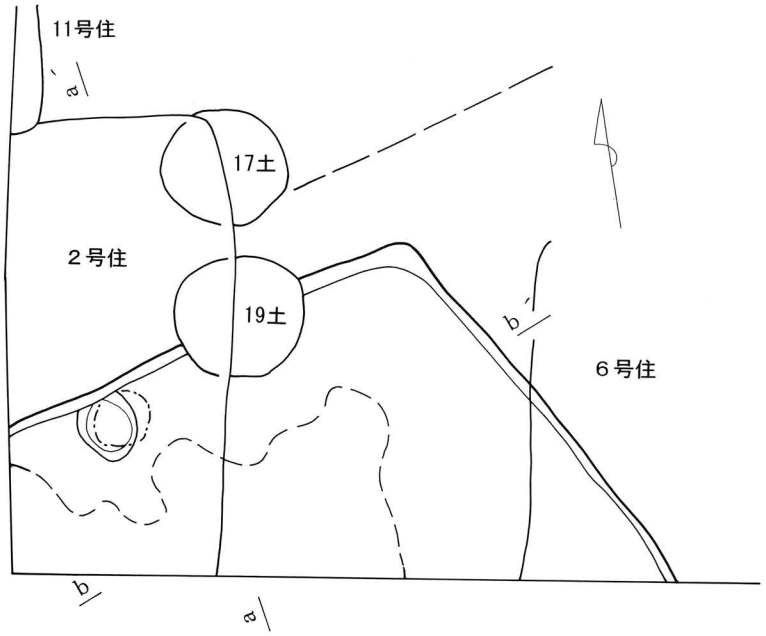
第17図　7号住居跡出土遺物

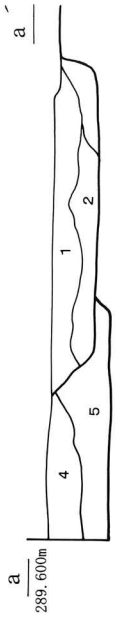
h．8号住居跡（第3・18・19図、第2表、図版3－5・6）

調査区の南西部、B－1・2、C－1・2グリッドに位置している。住居跡は西・南側と調査区外となり約半分は詳細が明らかでない。そして、2・6号住居跡と19号土坑によって切られている。

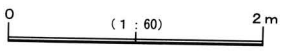
規模は、確認可能な範囲内で東西約4.2 m、南北約3.5 mあり、本来の形態は方形を呈するとみられる。壁は深さ40～48 cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がっている。

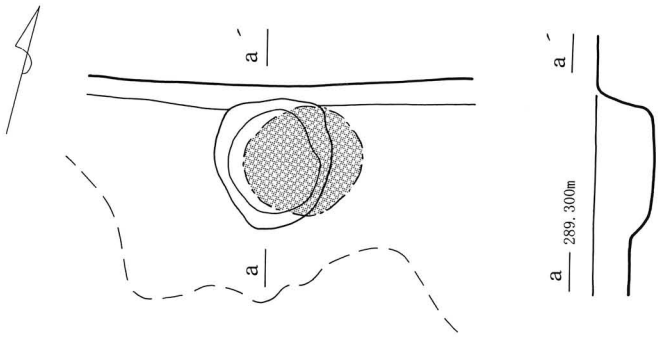
カマドは、本来住居跡の北壁に設けられていたことが窺えるが、後に2号住居跡が構築されたことで上半

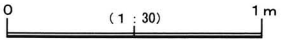




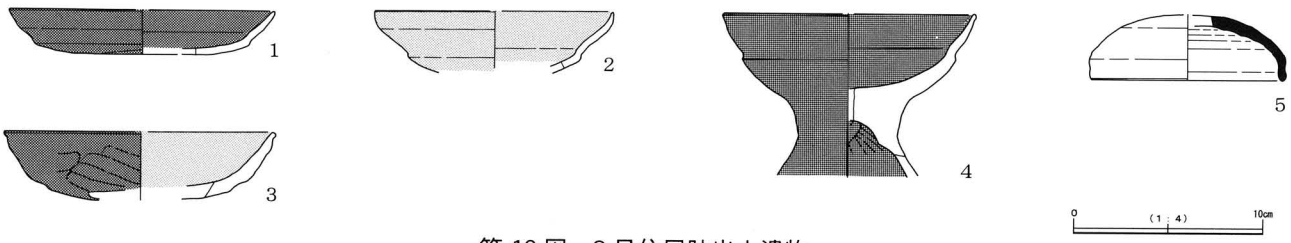
1．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、白色粒子多、2～3mm大の焼土粒多、2～3cm大の褐色土ブロック少。
2．茶褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、白色粒子少、焼土粒0.5mm大少。
3．黒褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、3～5cm大の褐色土ブロック。焼土粒0.3～0.5mm大少。
4．混褐色黒色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック2～3cm大多、2～3mm大の白色粒と焼土粒少。
5．黒褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、白色粒少、2～3mm大の焼土粒少。
6．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、白色粒少、2～5mm大の焼土粒多。
7．褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、3～5cm大の褐色土ブロック多。







第18図　8号住居跡とカマド



第19図　8号住居跡出土遺物

部が失われ、焚き口から燃焼部にかけての焼土を含んだ下部構造のみが残存していた。床面は多少緩やかな起伏がみられるが、総体的にはほぼ水平を保っており、ちょうど北カマドの正面を中心に住居跡中央に向かって硬く踏み締まった面が大きく展開していた。

遺物は、坏1～3、高坏4、須恵器坏蓋5など出土しており、とくに大きく屈曲した口縁部をもつ坏2、口径10 cm以下の須恵器坏蓋5などから、本住居跡は古墳時代後期(6世紀末～7世紀初頭）に所属するとみられる。

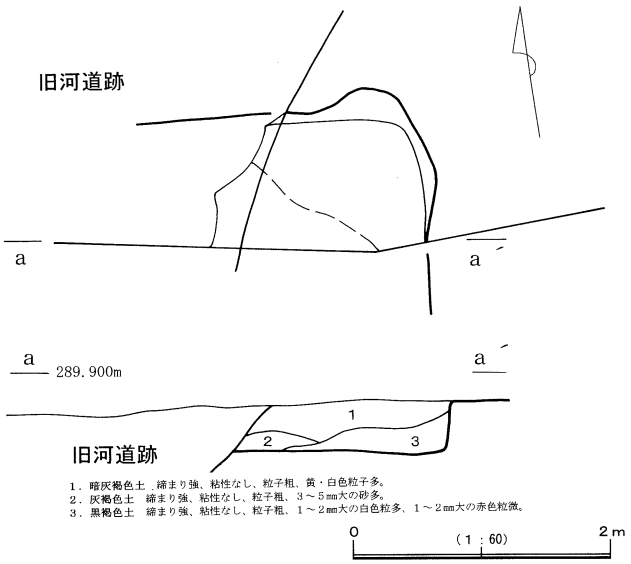
i．9号住居跡（第3・20・21図、第2表、第3－7）

調査区の東側南部、C－4・5グリッドに位置する。本住居跡の南側は調査区外で、西側は旧河道跡によって大きく削り取られ、僅かに住居跡北東隅部を確認できたに留まった。

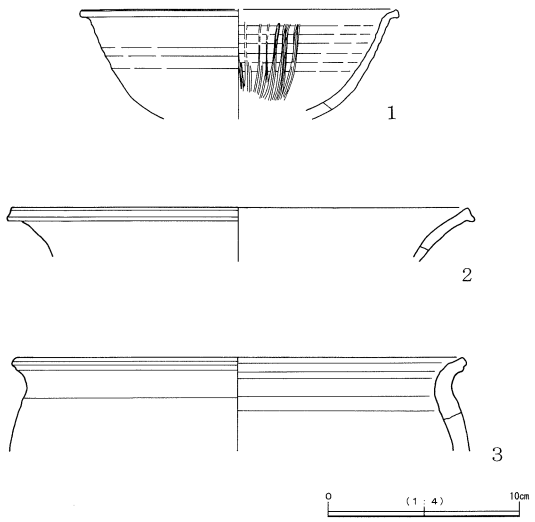
確認可能な規模は東西約1.5 m、南北約1.1 m、壁の深さ約40 cmを測り、垂直に立ち上がる。

床面は僅かに南西部にかけて土間状に固く踏み締まった面が確認できた。

遺物は、細片が多かったが内面に放射状暗文を施した鉢形土器1、ロクロ甕の口縁部2・3などが出土していることから、本住居跡は平安時代前半(9世紀前半）に相当するとみられる。



第20図　9号住居跡



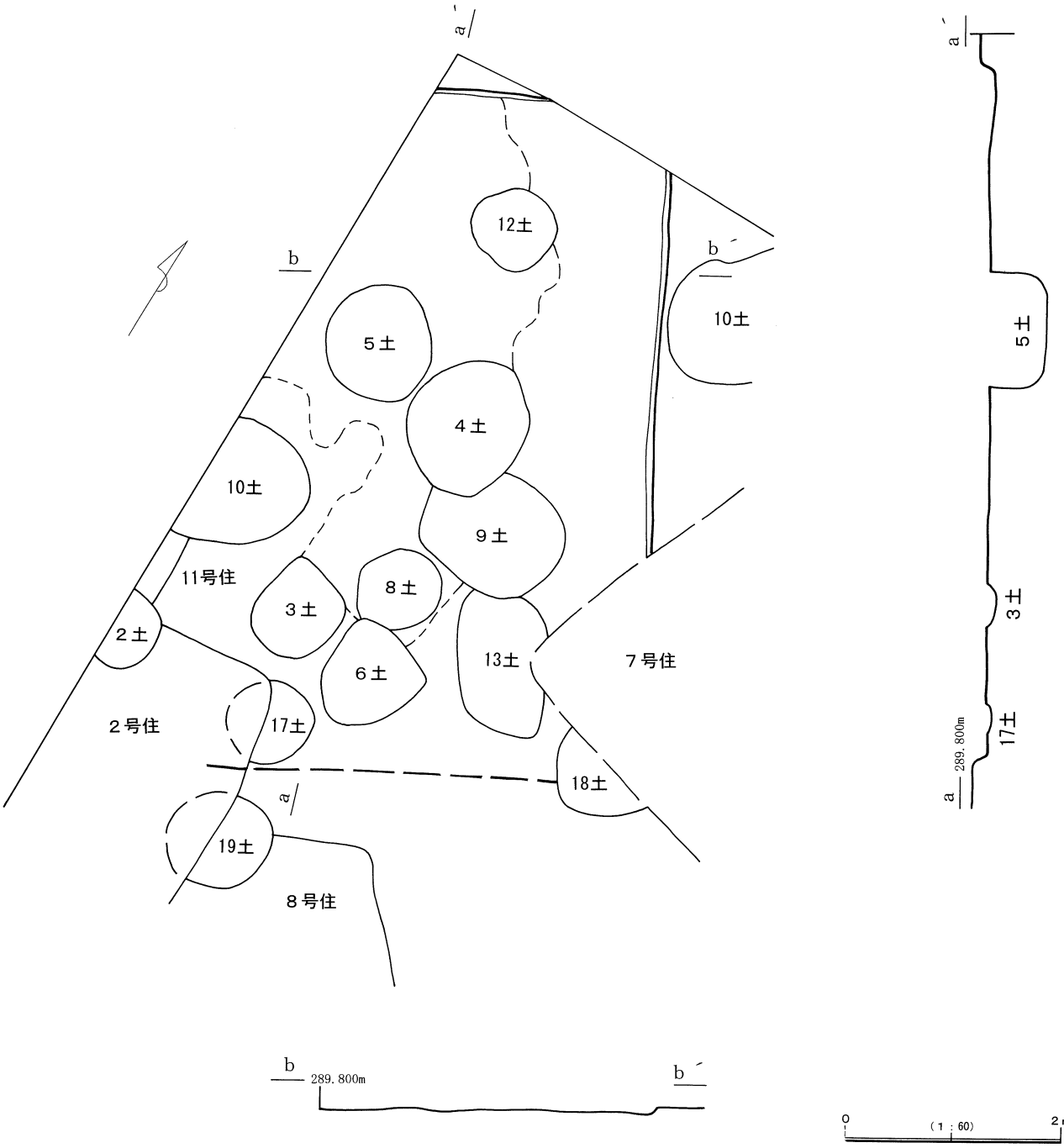
第21図　9号住居跡出土遺物

j．10号住居跡（第3・22・23図、第2表、第3－8）

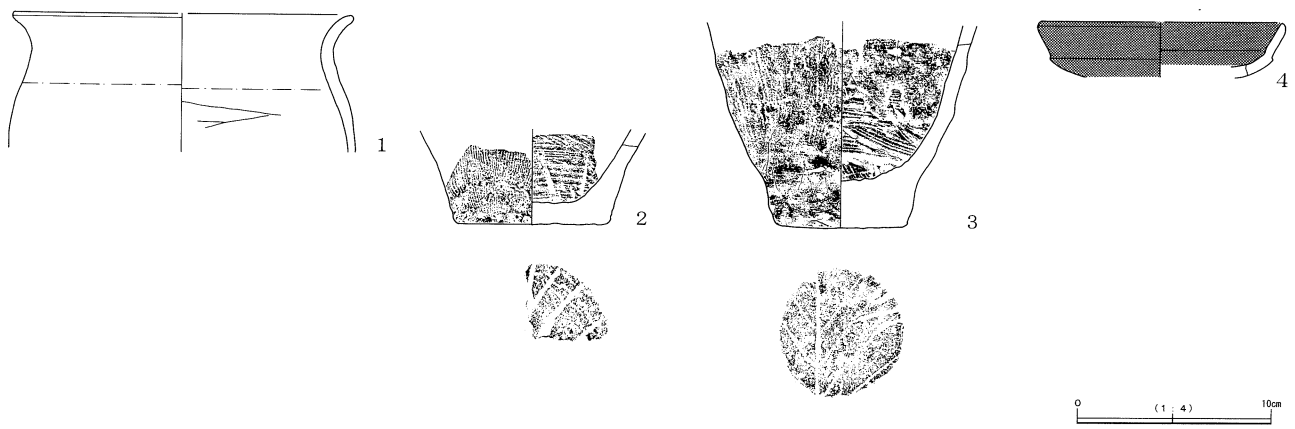
調査区の北西部、A－1・2、B－1・2グリッドに位置する。本住居跡は西半部が調査区外で不明であり、確認された範囲では2・7号住居跡と2～6・8～10・12～14・17・18号の計13基の土坑群によって大部分が重複して壊されており、本来の形状をほとんど留めていなかった。しかし、幸いにも北壁の一部と東壁を確認することができた。

重複した土坑群の内、12・13号は位置関係と深さなどから、もともと本住居跡の主柱穴であった可能性も考えられる。

床面はほぼ水平であり、住居跡の中央付近を中心に北から南側に向かって踏み締まった土間状の硬い面が確認された。本住居跡の東壁にはカマドが設けられた痕跡はなく、この硬い面の広がり方からみて北壁にカマドが構築されている可能性が高い。また、硬くなった床面は土坑が存在する部分ではいずれも認められないため、本住居跡構築後に土坑が築かれたことが窺われる。



第22図　10号住居跡



第23図　10号住居跡出土遺物

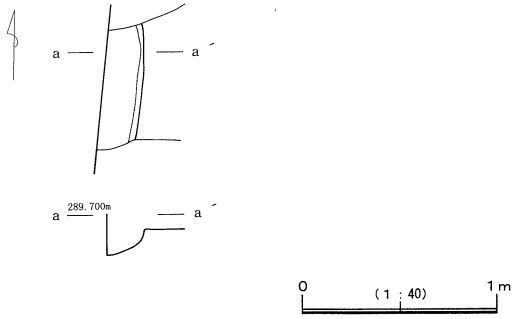
住居跡の規模は、確認可能な範囲内で東西約 4.5 m、南北は南壁を確認できなかったため詳細は明らかでないが、床面の硬い面の分布状況から勘案し、およそ 6.5 m を測るとみられる。

本住居跡に確実に伴うと判断される遺物は少ないが、甕 1～3、坏 4 などが出土していることから、本住居跡の所属時期は古墳時代後期（6 世紀後半）に相当するとみられる。

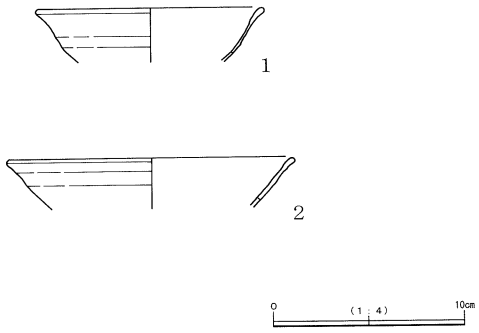
k．11 号住居跡（第 3・24・25 図、第 2 表）

調査区の西端、B－1 グリッドに位置する。確認できる大きさは南北約 1.0 m、東西約 0.33 m、深さ約 20 cm のわずかものであるが、当初土坑として扱ったが周辺から発見された土坑群と比較して形状や出土遺物の量とその内容に大きな相違が認められたことから、本体が調査区外に存在し、しかも 2 号住居跡と 2・10 号土坑により切られた住居跡として今回取り扱うこととした。

遺物には、他の土坑では認められない口縁が玉縁の形状を呈する坏 1・2 などの破片が多く出土していることから、本住居跡の所属時期は平安時代前半（10 世紀前半）に相当する。



第 24 図　11 号住居跡



第 25 図　11 号住居跡出土遺物

1住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	甕	29．8	(18．2)	—	粗、長石、石英、赤色粒子	赤褐色	良好	口縁部横ナデ。内面横方向ハケ目。外面縦方向ハケ目。	5
2	土師器	甕	(14．6)	11．4	—	粗、赤色粒子、長石、石英	赤茶褐色	良	口縁部横ナデ。	
3	土師器	甕	13．3	(16．6)	—	粗、長石、石英、赤色粒子、黒色雲母	暗橙褐色	良	口縁部横ナデ。内面横方向ハケ目。外面縦方向ハケ目。	
4	土師器	鉢	13．9	(28．2)	—	粗、赤色粒子、長石、石英、金色雲母	赤橙褐色	良	口縁部ナデ。内面横方向ヘラナデ。内面黒色。	
5	土師器	坏	4．1	14．0	—	粗、長石、石英、赤色粒子	黄橙色	良好	丹彩。内底面線刻。内面ナデ。外面ナデ、ヘラ削り。	
6	土師器	坏	4．0	(15．8)	—	粗、長石、石英、赤色粒子	暗橙褐色	良	丹彩。内面口縁部ハケ目。	
7	土師器	坏	2．9	(15．2)	—	粗、長石、石英、赤色粒子、	暗黄褐色	良	丹彩。外面ヘラ削り。	
8	土師器	坏	3．4	(12．6)	—	粗、長石、石英、赤色粒子	橙褐色	良	丹彩。外面ヘラ削り。	
9	土師器	坏	2．9	(13．0)	—	粗、赤色粒子、長石、石英	暗黄褐色	良好	黒彩。外面ヘラ削り。	
10	土師器	坏	4．0	14．1	—	粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良好	内面丹彩、外面黒彩。	
11	土師器	坏	3．4	(12．5)	—	粗、長石、石英、黒色雲母	暗黄褐色	良好	内外面黒彩。	
12	土師器	高坏	9．0	(13．2)	(9．3)	粗、長石、石英、赤色粒子	橙褐色	良	内面黒彩、外面丹彩。外面ヘラ削り。	
13	須恵器	蓋	4．0	(13．8)	—	密、長石、黒色雲母	青灰色	良好	ロクロ成形。	

2住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	球胴甕	4．9	—	—	やや密、赤色粒子、長石、石英	暗黄褐色	良	内面横方向ハケ目。外面斜め方向ハケ目。	7
2	土師器	坏	2．3	—	—	粗、石英、赤色粒子	黄褐色	良	内外面丹彩。	
3	土師器	坏	2．7	—	—	密、長石、赤色粒子	暗黄褐色	良	黒彩。	
4	手捏ね土器		4．1	4．2	4．4	粗、長石、石英、黒色雲母、赤色粒子	暗黄褐色	良		
5	土師器	坏	3．1	(12．0)	(4．2)	密、赤色粒子、長石、石英	暗橙褐色	良	外面ヘラ削り。	
6	土師質土器	坏	3．2	(13．7)	—	粗、金雲母、長石	暗茶褐色	良好	ロクロ成形。	
7	土師質土器	坏	4．2	(13．8)	5．2	粗、金雲母、長石	赤茶褐色	良好	ロクロ成形。底部糸切痕	
8	土師質土器	柱状高台坏	2．9	—	6．6	粗、長石、金雲母	暗赤茶褐色	良	ロクロ成形。底部糸切痕	

第 1 表　　住居跡出土遺物観察表（1）

3住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	坏	3．8	—	（8．0）	密、長石、石英、赤色粒子	黄褐色	良好	外面ヘラ削り。	9
2	土師器	鉢	4．5	—	（12．6）	密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面ヘラ削り。底部糸切り後ヘラ調整。	
3	須恵器	甕	6．4	（27．6）	—	粗、黒色粒子	灰白色	良		

4住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	甕	3．2	（15．6）	—	粗、長石、石英、赤色粒子	橙褐色	良好	口縁部横ナデ。	11
2	土師器	壷	2．9	—	6．4	粗、赤色粒子、長石、石英	赤茶褐色	良	底部木葉痕。	
3	土師器	坏	2．7	—	—	粗、長石、石英	橙褐色	良	丹彩。	
4	土師器	坏	3．1	（14．2）	—	やや密、長石、石英、赤色粒子	黄橙色	良好	内面磨き。外面ヘラ削り。	

5住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	甕	11．2	（21．0）	—	粗、赤色粒子、長石、石英、黒色雲母	赤茶褐色	良	口縁部横ナデ。内面ヘラナデ。	13
2	土師器	甕	6．2	（16．5）	—	粗、赤色粒子、長石、石英、金色雲母	暗茶褐色	良	内面ナデ。外面縦方向ハケ目。	
3	土師器	甕	7．8	（25．0）	—	粗、赤色粒子、長石、石英、小石、黒色雲母	橙褐色	良	内・外面ハケ目。	
4	土師器	坏	3．2	（14．2）	—	粗、赤色粒子、長石、石英	暗黄褐色	良	外面ヘラ削り。内面黒彩。内面磨き。	
5	土師器	坏	2．7	（13．2）	—	粗、赤色粒子、長石、石英	黒褐色	良	外面ヘラ削り。内外面黒彩。	
6	土師器	坏	3．8	（11．2）	—	粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面ヘラ削り。内面黒彩。	
7	土師器	坏	3．1	（12．0）	—	やや密、赤色粒子、長石、石英、金色雲母	橙褐色	良	外面ヘラ削り。内外口縁付近磨き。	
8	土師器	坏	4．5	11．9	—	粗、赤色粒子、長石、石英	暗橙褐色	良	外面ヘラ削り。内外面磨き。	
9	土師器	鉢	5．2	（16．6）	—	粗、長石、石英、赤色粒子	黄褐色	良	内外面丹彩。	
10	土師器	鉢	—	（9．4）	—	粗、長石、石英、赤色粒子	黒褐色	良	内外面丁寧な横磨き。内外面黒彩。	
11	土師器	高坏	7．4	11．1	8．0	粗、赤色粒子、長石、金雲母	暗黄褐色	良	脚部縦方向ヘラ削り。黒彩。坏部内外面磨き。	
12	土師器	手捏ね土器	4．3	5．0	4．8	粗、長石	暗赤茶褐色	良		

6住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	坏	4．6	11．3	5．3	密、長石、石英、赤色粒子	暗橙褐色	良	内面放射状暗文。外面ヘラ削り。底部糸切後ヘラ調整。	15
2	土師器	坏	4．9	11．4	6．2	密、長石、赤色粒子、石英	暗橙褐色	良	墨書「川」。内面放射状暗文。外面ヘラ削り。底部糸切痕。	
3	土師器	坏	4．3	（11．7）	—	密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	内面放射状暗文。外面ヘラ削り。	
4	土師器	坏	5．9	（16．6）	—	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内面放射状暗文。外面横磨き。	
5	土師器	皿	—	—	—	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	底部外面回転ヘラ削り。	
6	須恵器	坏	5．6	（14．8）	—	粗、白色粒子	青灰色	良	ロクロ成形。	
7	土　器	手捏ね	3．4	9．7	8．0	粗、長石、黒色雲母、赤色粒子	黄褐色	良	底部木葉痕。	
8	土師器	甕	—	—	（7．0）	粗、長石、金色雲母、赤色粒子	赤茶褐色	良	底部木葉痕。	
9	土師器	甕	—	—	（8．0）	粗、長石、金色雲母、赤色粒子	赤茶褐色	良	底部木葉痕。内外面ハケ。	
10	須恵器	転用硯	—	—	—	粗、白色粒子	灰色	良	外面叩き目、内面磨り面あり。	

7住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	羽釜	6．1	（27．6）	—	粗、長石、石英、小石、金色雲母	黒褐色	良		17
2	土師質土器	坏	3．4	（12．2）	（6．2）	粗、石英、金色雲母	暗赤茶褐色	良	底部糸切痕。	
3	土師質土器	坏	2．9	—	（6．2）	粗、長石、金色雲母	暗茶褐色	良	底部糸切痕。	
4	土師質土器	脚高高台坏	5．2	（15．4）	—	粗、長石、金雲母	暗茶褐色	良	ロクロ成形。	
5	灰釉陶器	坏	3．2	—	—	密、黒色粒子	乳白色	良	ロクロ成形。白化粧。	

8住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	坏	2．3	（14．0）	—	粗、赤色粒子、長石	黄褐色	良好	外面ヘラ削り。内外面黒彩。	19
2	土師器	坏	2．4	（11．6）	—	粗、赤色粒子、長石、石英	黒褐色	良	内外面丹彩。	
3	土師器	坏	3．5	（14．0）	—	粗、長石、石英、黒色雲母	暗黄褐色	良	内面丹彩。外面黒彩。外面ヘラ削り。	
4	土師器	高坏	7．2	（13．2）	—	やや密、長石、石英	暗橙褐色	良	内面横方向磨き。外面ヘラ削り、横方向磨き。内外面黒彩。	
5	須恵器	蓋	3．4	（10．2）	—	粗、黒色粒子	灰白色	良	ロクロ成形。	

9住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	鉢	5．3	（16．5）	—	粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	内面放射状暗文。	21
2	土師器	ロクロ甕	—	（24．0）	—	粗、赤色粒子、長石、黒色雲母	橙褐色	良		
3	土師器	ロクロ甕	—	（23．2）	—	粗、赤色粒子、長石、黒色雲母	赤橙褐色	良		

10住

No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	甕	—	（17．6）	—	粗、赤色粒子、長石、金・黒色雲母、小石	褐色	良好	内面口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。外面口縁部横ナデ。	23
2	土師器	甕	—	—	（8．0）	粗、長石、石英、赤色粒子、黒色雲母、小石	暗橙褐色	良	内面横方向ハケ目。外面縦方向ハケ目。底部木葉痕。	
3	土師器	甕	—	—	7．0	粗、長石、石英、赤色粒子、黒色雲母	暗橙褐色	良	内面横方向ハケ目。外面縦方向ハケ目。底部木葉痕。	
4	土師器	坏	2．8	（12．6）	—	密、赤色粒子、長石	黄褐色	良好	内外面黒彩。	

11住

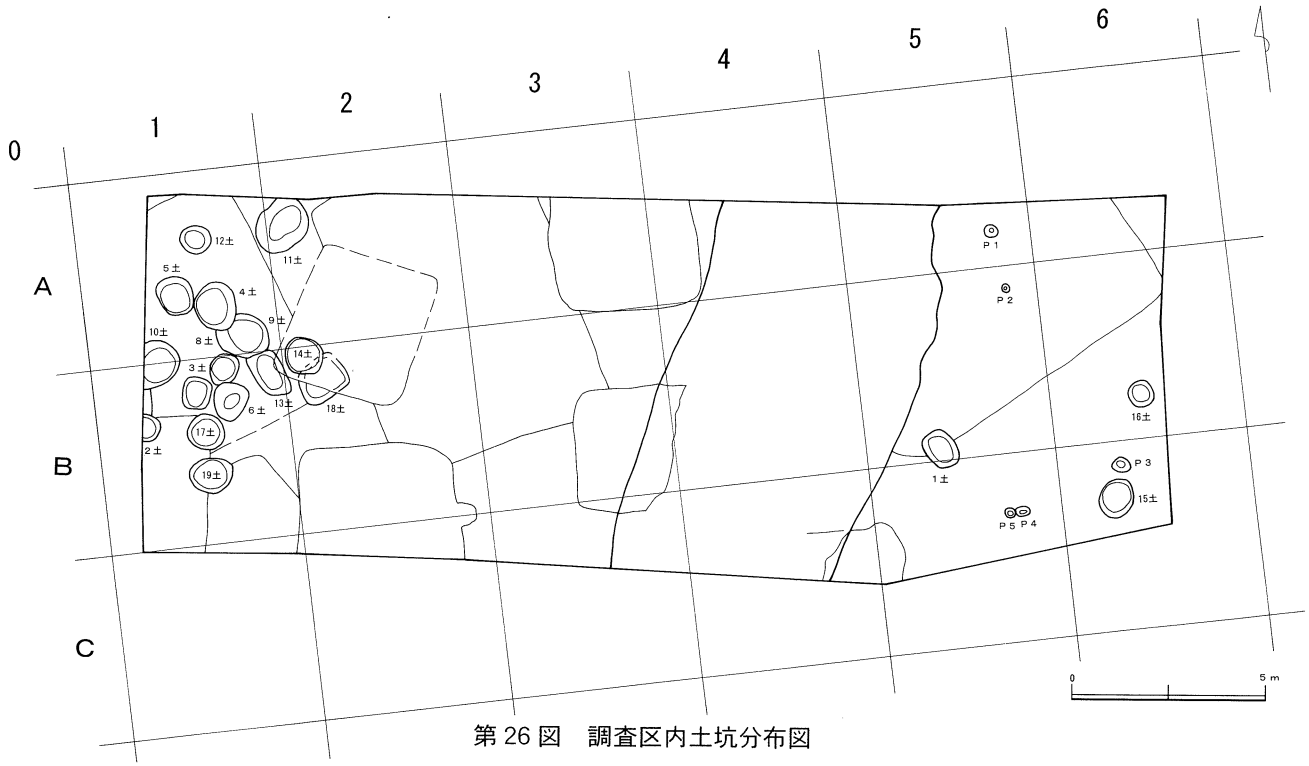
No.	器種	器形	大きさ（cm） 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
1	土師器	坏	—	（11．8）	—	粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	ロクロ調整。	25
2	土師器	坏	—	（15．0）	—	粗、長石、赤色粒子	黄橙褐色	良	ロクロ調整。	

第２表　　住居跡出土遺物観察表（2）

2．土坑とピット（第3・26～28図、第3表、図版4・5）

土坑は計19基が発見され、この内16基が調査区西側に集中するように偏在しており、3基は1号住居跡南側にある。円形のものが主体で中には4・5・10・14・17・19号土坑のように袋状を呈するものがある。遺物は古墳時代後期が主体で他に10・11世紀代のものが含まれる。

ピットは1号住の上面と調査区東側の計5ヶ所で認められたが、並ぶものはみられない。

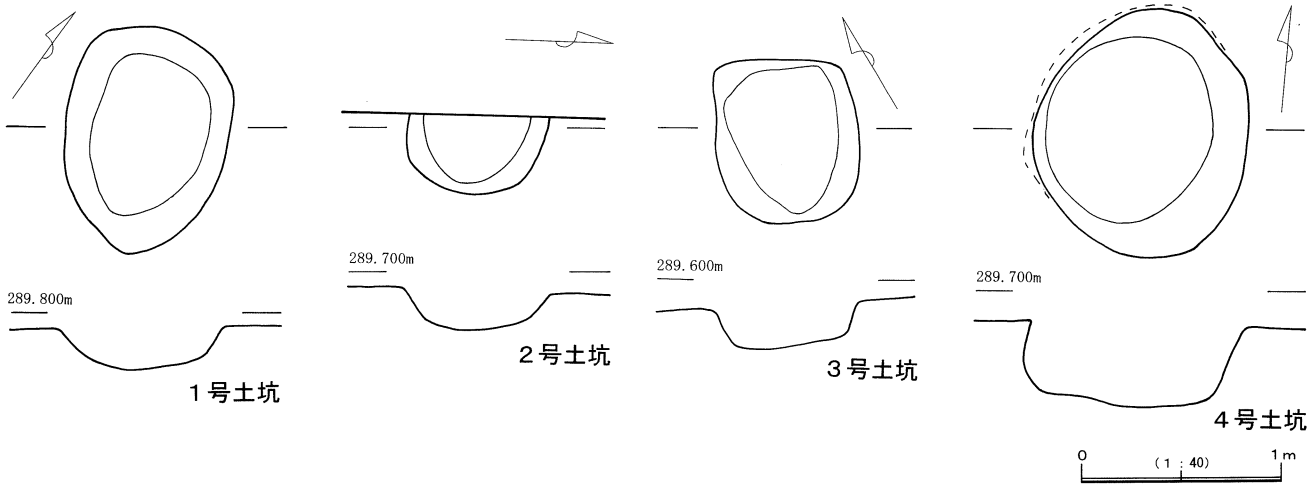


第26図　調査区内土坑分布図

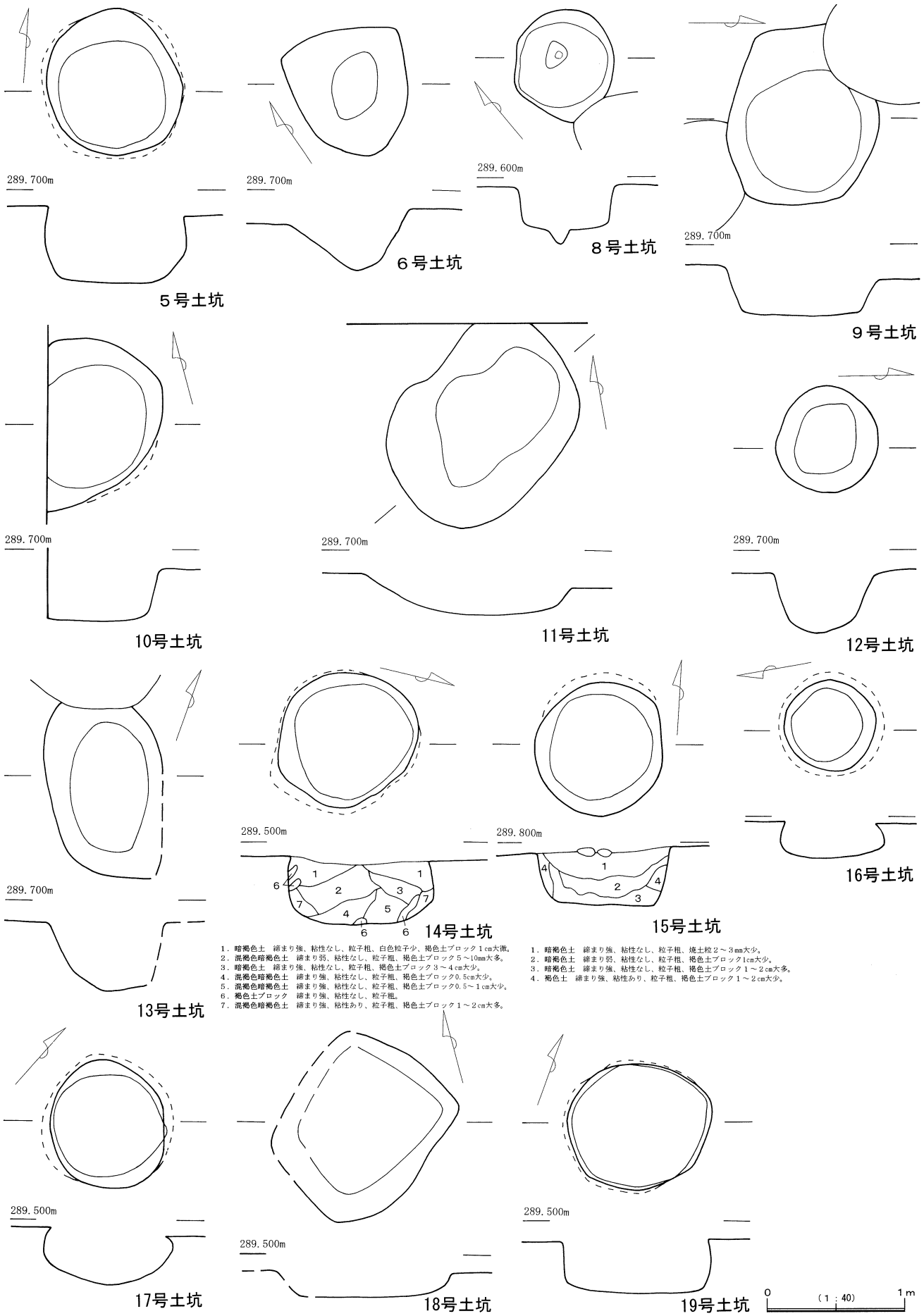
No.	グリッド	形態	規模（cm）			備考	図版
			長軸	短軸	深さ		
1号	B・C－5	楕円形	120	85	22		4-2
2号	B－1	楕円形	74	(42)	23		4-3
3号	B－1	楕円形	86	76	23		4-4
4号	A－1	楕円形	128	110	46		4-5
5号	A－1	円形	110	100	58		5-1
6号	B－1	不整形	97	88	45		
8号	B－1	円形	85	76	30	中央にピット	5-2
9号	A・B－1	楕円形	136	110	38		
10号	A・B－1	楕円形	135	115	39		

No.	グリッド	形態	規模（cm）			備考	図版
			長軸	短軸	深さ		
11号	A－1・2	楕円形	157	120	31		5-3
12号	A－1	円形	80	77	46		
13号	B－1・2	楕円形	150	85	50		
14号	A・B－2	円形	118	98	53		
15号	C－6	円形	102	96	43		5-4
16号	B－6	円形	70	67	28		
17号	B－1	円形	100	87	37		5-5
18号	B－2	方形	130	(110)	18		
19号	B－1	円形	108	96	38		5-6

第3表　土坑一覧



第27図　土坑（1）


289.700m
5号土坑
289.700m
6号土坑
289.600m
8号土坑
289.700m
9号土坑
289.700m
10号土坑
289.700m
11号土坑
289.700m
12号土坑
289.700m
13号土坑
289.500m
14号土坑
1．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、白色粒子少、褐色土ブロック１cm大微。
2．混褐色暗褐色土　締まり弱、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック５～10mm大多。
3．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック３～４cm大少。
4．混褐色暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック0.5cm大少。
5．混褐色暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック0.5～１cm大少。
6．褐色土ブロック　締まり強、粘性なし、粒子粗。
7．混褐色暗褐色土　締まり強、粘性あり、粒子粗、褐色土ブロック１～２cm大多。
289.800m
15号土坑
1．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、焼土粒２～３mm大少。
2．暗褐色土　締まり弱、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック1cm大少。
3．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック１～２cm大多。
4．褐色土　締まり強、粘性あり、粒子粗、褐色土ブロック１～２cm大少。
16号土坑
289.500m
17号土坑
289.500m
18号土坑
289.500m
19号土坑
0
(1：40)
1m

第28図　土坑（2）

3．旧河道跡（第２・３・31図、図版５－７・８）

調査区の中央やや東寄り、Ａ－４・５、Ｂ－３～５、Ｃ－３～５に位置し、南北に縦断して発見された。規模は、長さ約10ｍ、幅約6.5ｍあるがさらに南・北の調査区外へと延びている。

この旧河道跡は、すでに調査を終了した南側に隣接する第Ⅰ・Ⅱ次調査区（第２図）においても確認されており、このことから今回の第Ⅴ次調査区から第Ⅱ次調査区へと北東から南西に向かって約130ｍ以上も延びていることが明らかとなった（第31図）。

旧河道跡は、基本的に砂利で拳大から人頭大、それを越えるような大型の石を多く含んで構成されている。そして、石と砂利に混ざって細片の遺物が出土している。

遺物には、縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代のものが出土しており、とくに古墳時代後期(6世紀後半)から平安時代(12世紀）のものが多い。

今回の調査では１・３・９号住居跡を破壊するように発見され、これらの遺構の時期から平安時代(10世紀前半）以降であることは間違いない。また、この河跡から出土したものには平安時代末の土師質小皿や12世紀代の柱状高台坏、また白磁碗（Ⅴ類）などが含まれることから、少なくとも12世紀以降においてこの河道跡ができたと考えられる。

4．遺構外出土遺物（第29図、第４表、図版７－３～８）

ここでは、遺構外から出土したものをはじめ、遺構から出土していても時期的に伴わないと判断されるものや上記で述べた旧河道跡から出土した主なものを一括して掲載することとした。

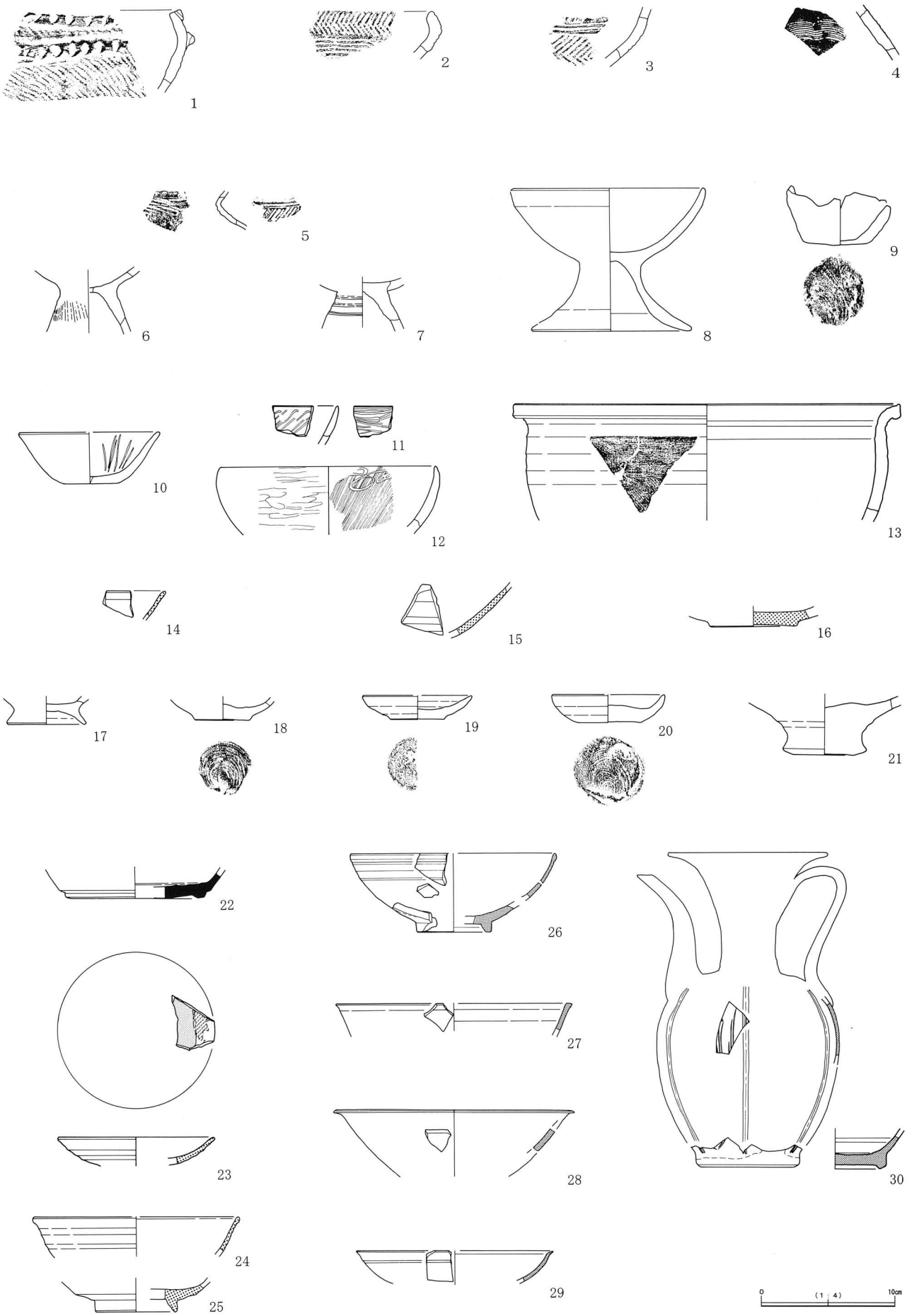
本調査区内からは縄文時代前期末１～３、弥生時代後期４、古墳時代前期５～７、古墳時代後期８・９、奈良・平安時代10～30の土器・陶磁器類と31～33の石器類などが出土している。

No.	器種	器形	出土地点	大きさ（cm）			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
				器高	口径	底径					
1	縄文土器	深鉢	11号土坑	5．5	—	—	粗、長石、石英、小石	赤茶褐色	良		7
2	縄文土器	深鉢	5号住	3．0	—	—	粗、長石、石英、黒色雲母	褐色	良		7
3	縄文土器	深鉢	11号土坑	3．0	—	—	粗、長石、石英、黒色雲母	淡茶褐色	良		7
4	弥生土器	壺	2号住	—	—	—	粗、長石、石英、黒色雲母	赤茶褐色	良	櫛描波状文。	
5	土師器	S字甕	5号住	2．1	—	—	粗、長石、石英、金色雲母	赤茶褐色	良		7
6	土師器	台付甕	2号住	3．9	—	—	粗、長石、石英、小石	暗茶褐色	良		7
7	土師器	高坏	3号住	2．9	—	—	粗、長石、石英	褐色	良	外面横方向ハケ目。	7
8	土師器	高坏	6号住	10．8	14．2	11．0	粗、長石、黒色雲母	橙褐色	良	脚表面丹彩。口辺部横ナデ。外面削り後、磨き。	7
9	土　器	手捏ね	河道跡北	4．4	7．5	4．9	粗、長石、石英、金・黒色雲母	褐色	良		7
10	土師器	坏	3住・旧河跡	3．9	(10．4)	4．0	粗、長石、黒色雲母、赤色粒子	黄褐色	良	内面放射状暗文。内外面磨き。	7
11	土師器	坏	2号住	—	—	—	粗、長石、黒色雲母、赤色粒子	橙褐色	良	外面横磨き、内面斜方向の暗文。	7
12	土師器	坏	7号住	—	(16．0)	—	粗、長石、黒色雲母、赤色粒子	橙褐色	良	外面横磨き、内面横位の螺旋状暗文と斜方向の暗文。	7
13	土師器	ロクロ甕	1号住河付近	—	(28．8)	—	粗、長石、黒色雲母、赤色粒子	橙褐色	良	外面の一部にハケ目。	7
14	緑釉陶器	碗	6号住	1．9	—	—	粗、長石	乳白色	やや良		7
15	緑釉陶器	碗	6号住	3．6	—	—	粗、黒色粒子	灰色	良		7
16	緑釉陶器	碗	河道跡北	1．2	—	6．4	粗、小石	乳白色	良		7
17	土師質土器	脚高高台坏	河道跡北	1．8	—	5．6	粗、長石、金色雲母	茶褐色	良		7
18	土師質土器	小皿	河道跡北	1．4	—	4．1	粗、長石、金・黒色雲母	赤茶褐色	良	底部糸切痕。	7
19	土師質土器	小皿	A－1	1．8	(8．0)	4．0	粗、石英、金色雲母	暗赤茶褐色	良	底部糸切痕。	7
20	土師質土器	小皿	河道跡北	2．1	(8．4)	4．8	金・黒色雲母	暗赤茶褐色	良	底部糸切痕。	7
21	土師質土器	柱状高台坏	1号住河付近	4．2	—	4．4	粗、金・黒色雲母、長石	暗赤茶褐色	良		7
22	須恵器	高台坏	1号住	1．8	—	(9．4)	粗、長石、白色粒子	青灰色	良		7
23	灰釉陶器	皿	河道跡北	—	(11．6)	—		灰白色	良	磨り面あり。内面朱が付着。	7
24	灰釉陶器	碗	5号住	2．6	(15．2)	—	粗、白色粒子	灰白色	良		7
25	灰釉陶器	碗	一括	2．4	—	(6．4)	粗、黒色粒子	灰白色	良		7
26	磁器	白磁碗	7号住	—	—	(5．4)	粗、黒色粒子	灰色	良	白磁Ⅱ類。11世紀中頃～11世紀後半。口縁部は第1次調査区、底部は第2次調査区で出土している。	7
27	磁器	白磁碗	河道跡北	2．0	(17．0)	—	粗、黒色粒子	青白色	良	白磁Ⅴ類。12世紀代。	7
28	磁器	白磁碗	3号住	1．7	—	—	粗、黒色粒子	灰白色	良	白磁Ⅴ類。12世紀代。	7
29	磁器	青白磁皿	6号住	2．3	(14．6)	—	粗、黒色粒子	灰白色	良	青白磁。12世紀代。	7
30	磁器	白磁水注	5号住	—	—	6．8	粗、黒色粒子	灰白色	良	11世紀代。底部は第1次調査区で出土したもの。	7

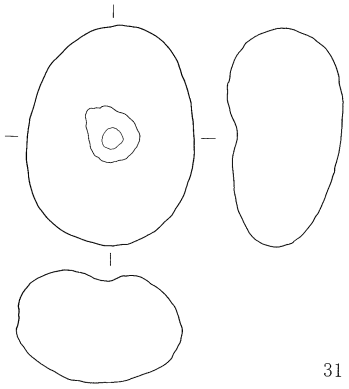
No.	計測値（cm）			石　材	特　　徴	挿図
	最大長	最大幅	最大厚			
31	11．8	8．9	6．2	花崗岩	中央に凹部。	30
32	10．3	1．4	4．9	粘板岩		

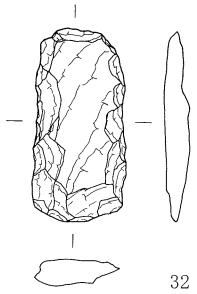
No.	計測値（cm）			石　材	特　　徴	挿図
	最大長	最大幅	最大厚			
33	7．8	1．8	5．5	粘板岩		30

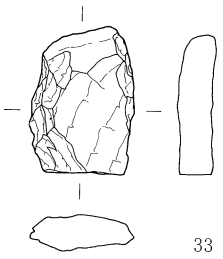
第４表　　遺構外出土遺物観察表



第29図　遺構外出土遺物（1）







第30図　遺構外出土遺物（2）

ま　と　め

今回の第Ⅴ次調査は約250㎡の調査区であったが、住居跡11軒、土坑19基、ピット5ヶ所が複雑に重複し合って発見された。各住居跡の時期は以下のとおりである。

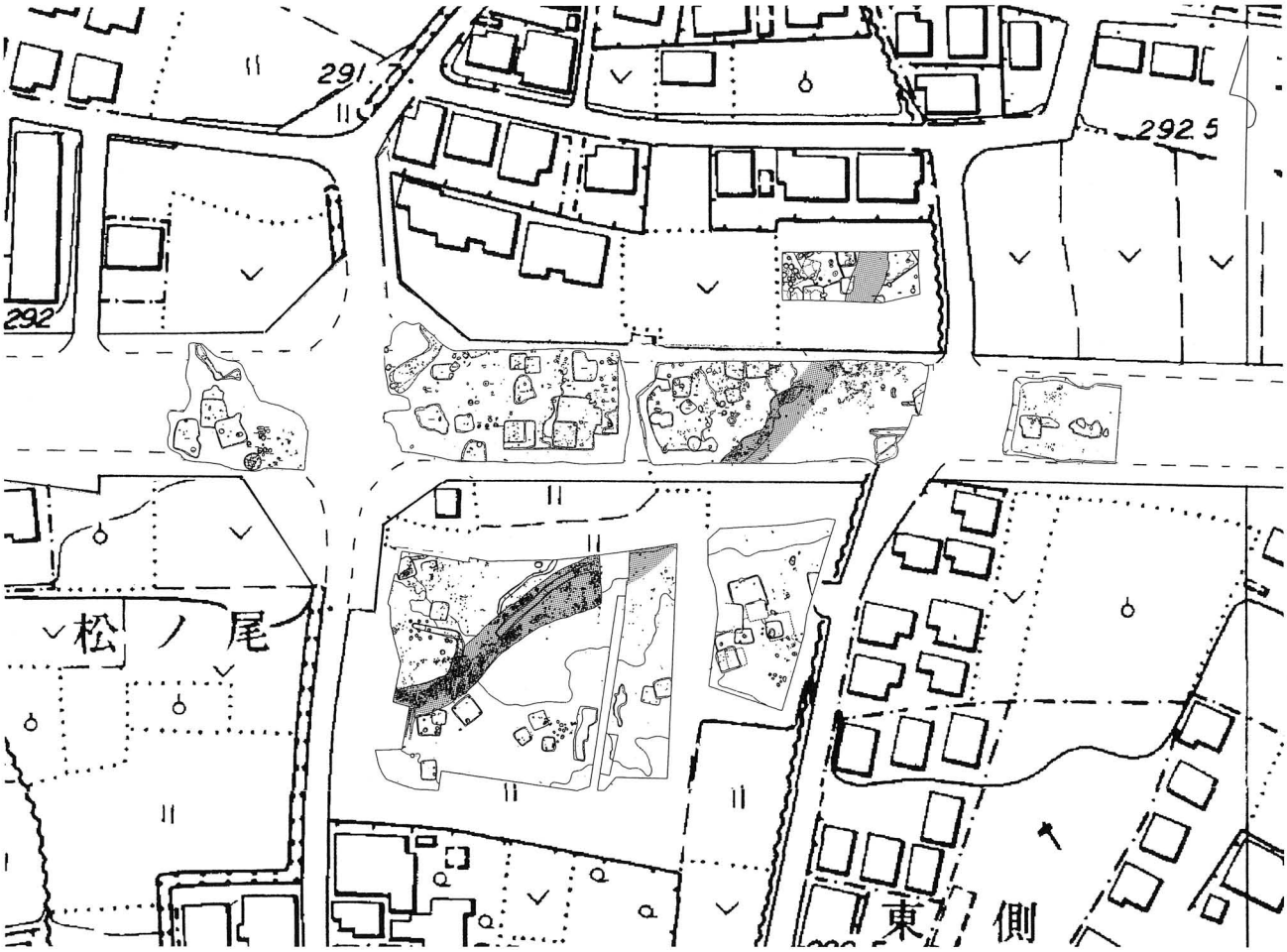
古墳時代後期(6世紀後半)	1号住居跡、10号住居跡
古墳時代後期（6世紀末～7世紀初頭）	5号住居跡、8号住居跡
奈良時代（8世紀代）	4号住居跡
平安時代（9世紀前半）	9号住居跡
平安時代（9世紀中頃）	6号住居跡
平安時代（10世紀代）	3号住居跡、11号住居跡
平安時代（11世紀前半）	7号住居跡
平安時代（12世紀代）	2号住居跡

過去に行われてきた周辺の調査成果では、第Ⅰ次調査において古墳時代後期5軒、竪穴状遺構1基、平安時代9世紀後半2軒、同10世紀代5軒、竪穴状遺構1基、同11世紀代5軒、竪穴状遺構2基、同12世紀代1軒で詳細不明なものに平安時代3軒、竪穴状遺構3基がある。

第Ⅱ次調査では、弥生時代末～古墳時代初頭1軒、古墳時代後期8軒、奈良時代3軒、平安時代9世紀代1軒、同10世紀代2軒、同11世紀代4軒が発見されている。

このように、近年の調査成果を通してみると、松ノ尾遺跡はまだ断続的な部分はあるものの主に古墳時代後期(6世紀後半）から平安時代の終わり(12世紀）にかけてほぼ連綿と存続していた集落遺跡であったことが明らかとなってきている。

このような様相は、現在松ノ尾遺跡の包蔵地となっている南部一帯にかけても広がりをもつことが窺える。今回の第Ⅴ次調査区から直線距離にして約300ｍ南では平成10年にマンション建設に伴い調査がおこなわれているが（第Ⅲ次調査)、ここから縄文時代中期住居跡1軒、古墳時代後期(7世紀前半）の住居跡2軒、平安時代9世紀後半の住居跡1軒、同じく10世紀前半の住居跡3軒からなる計7軒の住居跡が発見されており、長期にわたり集落跡が広範囲に展開していたようである。



第31図　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ次調査区概要図(1:1500)

松ノ尾遺跡出土の貿易陶磁器について

今回、特筆されることは貿易陶磁器の出土である（第29図26～30)。完形品のものはなくすべて破片であるが、白磁と青白磁があり、器種は碗3点、皿1点、水注1点の計5個体分が出土している。

全国で古代から中世の初めにかけて貿易陶磁器が最も出土しているのは、当時大陸との玄関口であった九州博多の大宰府や鴻臚館、政治の中心地であった平城京、平安京などが上げられる。

大宰府ではこれまでに出土した白磁・青磁を器種分類し、土器型式の編年と対照させ年代傾向が示されている。とくに白磁はⅠ～XⅣ類に器種分類され、それぞれの年代が整理されている。

これによると、今回出土した5点は第29図26が白磁碗Ⅱ類(11世紀後半～12世紀前半)、第29図30の水注胴部片が白磁碗Ⅱ類とほぼ併行するとみられるもので11世紀代、第29図27・28が白磁Ⅴ類(12世紀代～13世紀前半)、第29図29が12世紀代の青白磁の皿に相当する。

中でも、第29図26の白磁碗Ⅱ類は、過去の第Ⅰ・Ⅱ次調査でも破片が出土している（第29図26の口縁部は第Ⅰ次出土、底部は第Ⅱ次出土のもの)。この白磁Ⅱ類の碗は、今のところ県内では初例とみられる。

また、同図30（底部は第Ⅰ次出土のもの）の白磁水注は胴部に縦位2本一対の細い凸帯が6区に区切られ均等に垂下した、いわゆる「瓜割り」の水注であるが、類例として滋賀県大津市出土の水注（中国北宋時代前期）などが有名で全国的にも珍しいものである。

貿易陶磁器は今回の調査区に限らず、本遺跡内でこれまで一定量が確認されており、整理しておきたい。

本調査区から南側に隣接する第Ⅰ・Ⅱ次調査区（第2・31図）では、白磁碗XⅠ類3片(3個体分、「Ⅰ類」の可能性も残す。)、白磁碗Ⅱ類4片(3個体分以上、第Ⅰ次では口縁部1点と底部1点、第Ⅱ次では底部2点

出土)、11 世紀代の白磁水注の底部 1 点（第 29 図 26 の底部、今回出土のものと同一個体と考えられる。)、白磁碗Ⅴ類 2 片(2 個体)、青白磁碗・皿 3 片(3 個体)、白磁壺 1 片(1 個体）のほか、劃花文や櫛描文、鎬蓮弁文などが施された青磁碗 4 片などもある（註 1)。

また、遺跡南部の第Ⅲ次調査区でも白磁と青磁が出土している。その内、白磁は「蛇の目高台」を有する碗Ⅰ類の底部に相当し、いわゆる「初期貿易陶磁器」と一般に呼ばれている古いものである（註 2)。あと、青磁は 12 世紀中葉～13 世紀前半の劃花文や鎬蓮弁文などがある。

今回の調査で出土した白磁碗Ⅴ類や青白磁皿などのとくに白磁碗Ⅳ類以降のもの(12 世紀以降）は、山梨県内でも近年各地域で比較的よく出土してきている。代表的な遺跡では、塩山市一ノ坪遺跡、勝沼町勝沼氏館跡、一宮町笠木地蔵遺跡、同西田町遺跡、韮崎市中田小学校遺跡、南アルプス市百々遺跡などが上げられ、青白磁や白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、四耳壺、合子などがみられる（註 3)。

しかし、本遺跡では上述した他遺跡のものに比べ、さらに古手の白磁碗Ⅰ・ⅩⅠ・Ⅱ類（現在 7 個体以上）が認められ、県内でもこのような古い白磁が出土していることは、松ノ尾遺跡の一つの大きな特徴といえよう。

中でも、白磁碗Ⅰ類などをはじめとする「初期貿易陶磁器」が出土する遺跡の性格については、これまで全国の事例から九州博多の大宰府や京都の平安京などの遺跡を除く以外では、1・2 点ないしは数点が出土するだけで、しかも官衙跡や寺院跡のような国家権力が介在し求心力をもった遺跡でみられるという傾向が指摘されている（註 4)。

以上、今回の第Ⅴ次調査区とその周辺からこれまでに出土した貿易陶磁器について概観してきた。

今回出土した碗、皿、水注の白磁や青白磁などは決して一般的な集落跡で頻繁に出土するようなものではなく当時では奢侈品であり、このようなものが本遺跡内に存在する背景には周辺に相当な権力をもった豪族、富豪層などの館跡やその関連施設、または官衙関連遺跡などの存在が予測される。今後も、時期別に遺構の内容、分布状況、遺構内外から出土する遺物の整理検討をとおしながら、多角的に本遺跡の性格を十分に検討していく必要性がある。

（註）

1．京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏、平泉町教育委員会八重樫忠郎氏、福岡市教育委員会大庭康時氏の御教示による。白磁碗ⅩⅠ類は福岡市教育委員会の大庭氏に御教示いただいた。現在、東日本において、白磁碗ⅩⅠ類は東北地方で宮城県大仏遺跡から 1 例のみ確認されており、関東甲信越地方では本遺跡が初例とみられる。

2．百瀬正恒氏の御教示による。この白磁碗Ⅰ類底部は邢窯産で、生産年代はおよそ 9～10世紀頃とみられる。

3．勝沼町勝沼氏館出土のものは2002年におこなわれた山梨県貿易陶磁器研究会での勝沼町教育委員会室伏氏の御教示による。

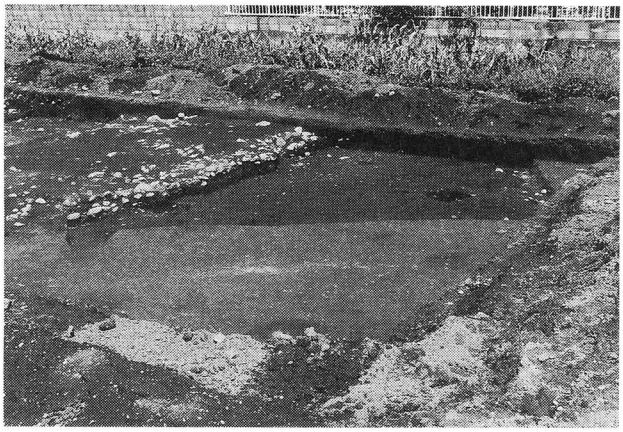
4．奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編「貿易陶磁器－奈良・平安の中国陶磁－」　臨川書店　1993
長谷部楽爾・今井　淳「中国の陶磁12　日本出土の中国陶磁」　平凡社　1995
今井　淳「日本の美術 7　宋・元の青磁・白磁と古瀬戸」№410　至文堂　2000

引用・参考文献

大宰府市教育委員会　2000年　「大宰府条坊跡ⅩⅤ　－陶磁器分類編－」　太宰府市の文化財　第49集
櫛原功一他　2000 年　「石之坪遺跡（東地区)」　韮崎市教育委員会・石之坪遺跡発掘調査会ほか
大嶌正之　1996 年　「松ノ尾遺跡」　敷島町教育委員会
小野正文他　1997 年　「一ノ坪遺跡発掘調査報告書」　山梨県教育委員会・山梨県土木部
平野　修他　1992 年　「宮ノ前遺跡」　韮崎市教育委員会・宮ノ前遺跡発掘調査団ほか
長沢宏昌他　1985 年　「笠木地蔵遺跡」　山梨県教育委員会・日本道路公団
櫛原功一他　1997 年　「西田町遺跡調査報告書」　一宮町教育委員会・西田町遺跡発掘調査団
小坂隆司　2004 年　「松ノ尾遺跡Ⅲ」　敷島町教育委員会
韮崎市教育委員会他　1985 年　「中田小学校遺跡」
齊藤孝正「日本の美術 6　越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器」№. 409　至文堂　2000
今井　淳「日本の美術 7　宋・元の青磁・白磁と古瀬戸」№. 410　至文堂　2000
長谷部楽爾・今井　淳「中国の陶磁 12　日本出土の中国陶磁」　平凡社　1995

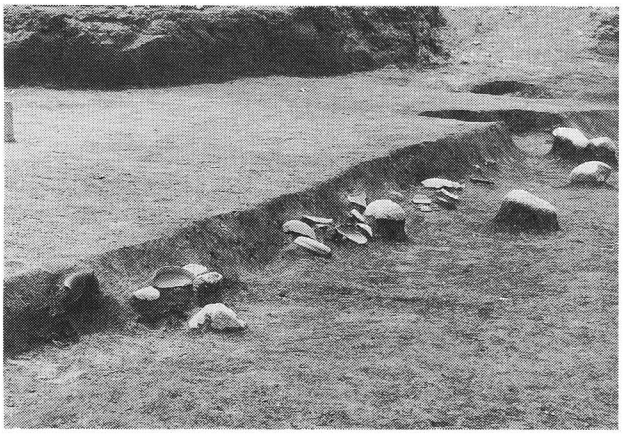
図版 1

1．調査区全景

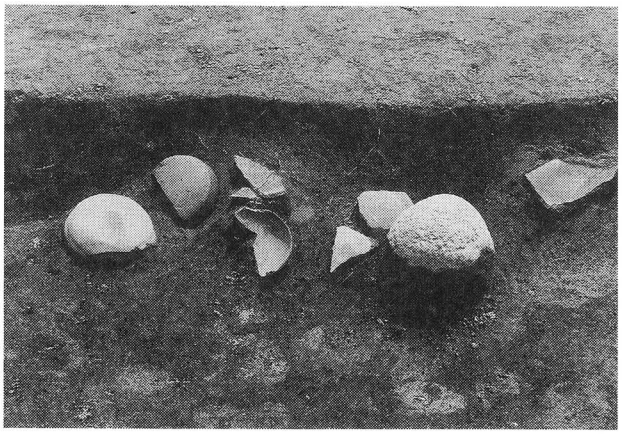


2．１号住居跡(南から)

3．１号住居跡(東から)

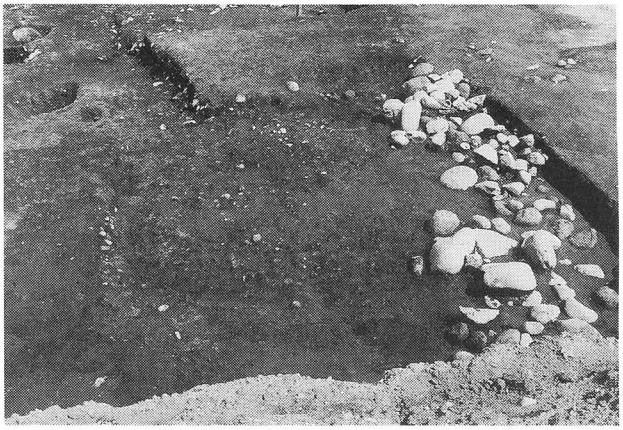


4．１号住居跡遺物出土状態（1）



5．１号住居跡遺物出土状態（2）

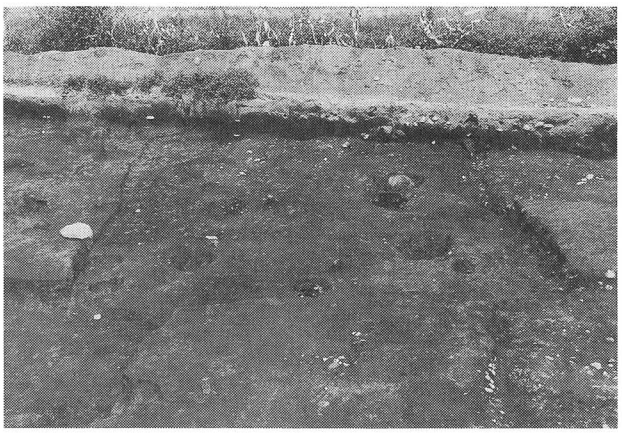
1. 2 号住居跡



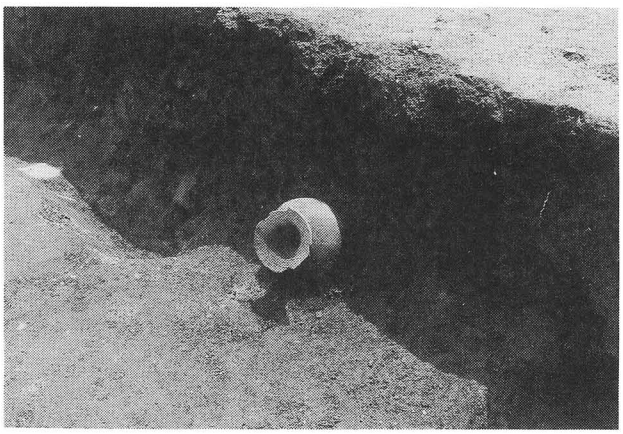
2. 3 号住居跡

3. 4 号住居跡

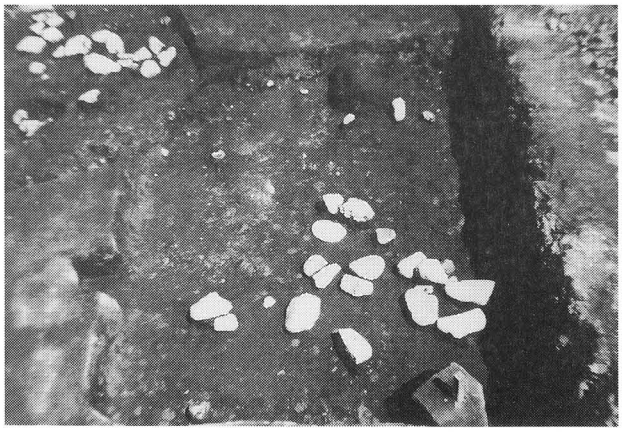
4. 4 号住居跡カマド



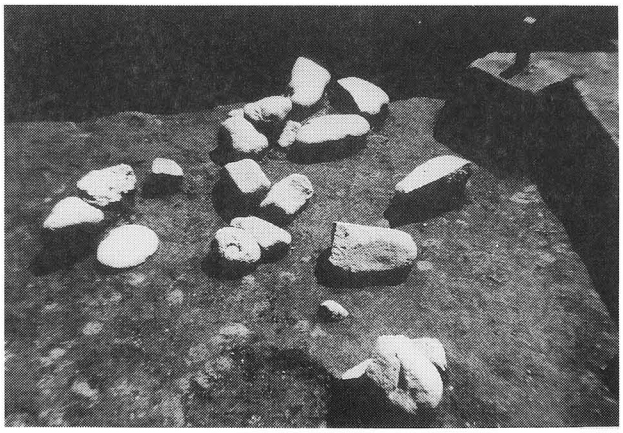
5. 5 号住居跡



6. 5 号住居跡遺物出土状態

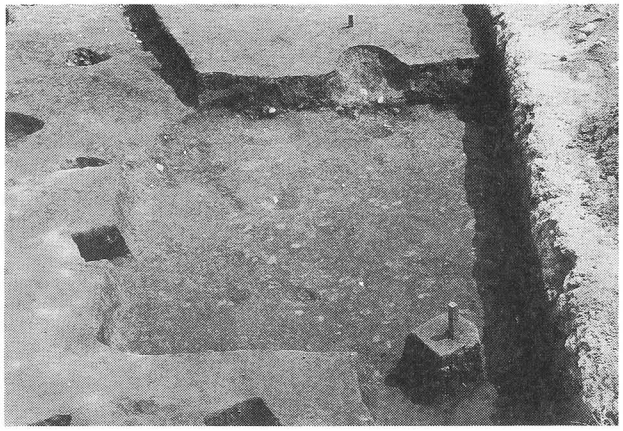


7. 6 号住居跡

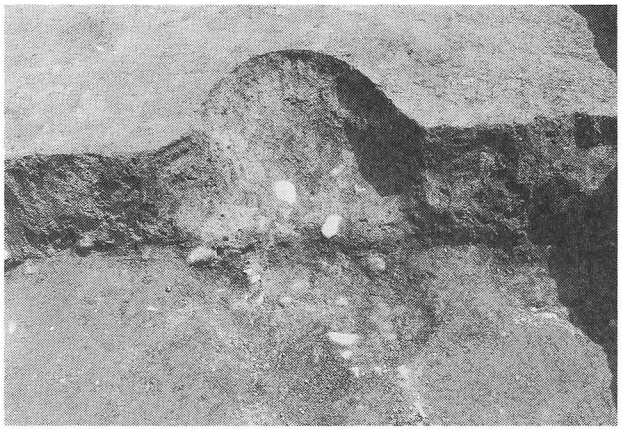


8. 6 号住居跡遺物出土状態

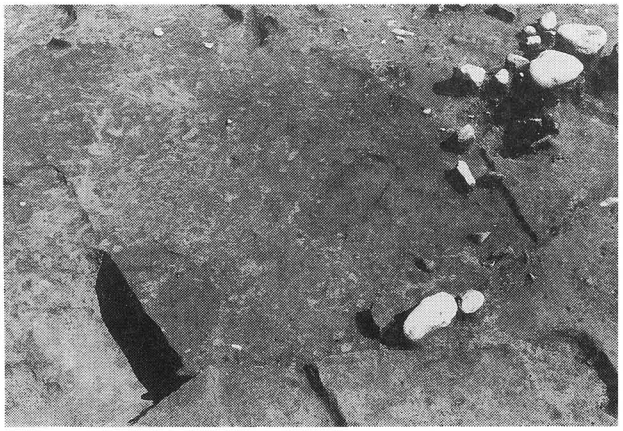
図版 3



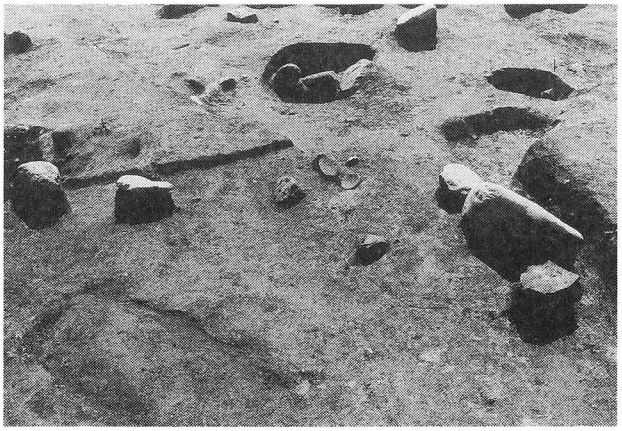
1. 6 号住居跡



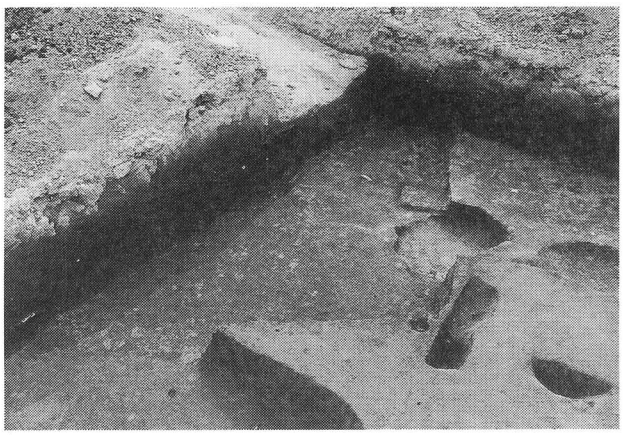
2. 6 号住居跡カマド



3. 7 号住居跡

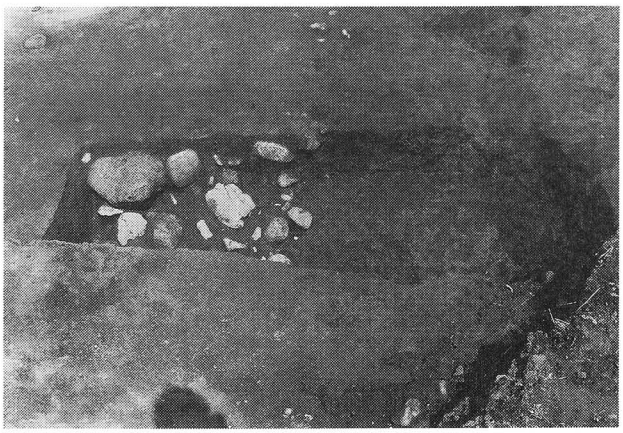


4. 7 号住居跡カマド周辺



5. 8 号住居跡

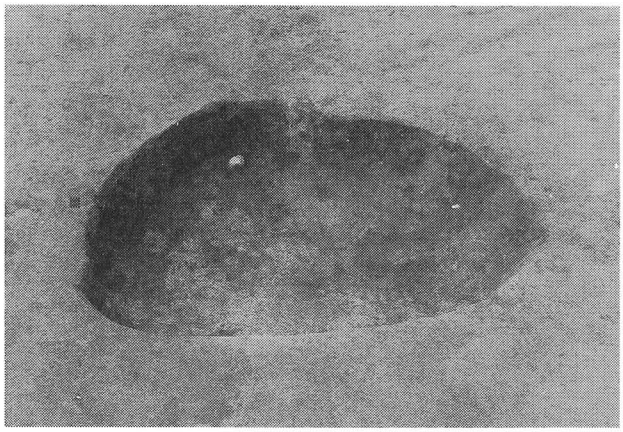
6. 8 号住居跡遺物出土状態



7. 9 号住居跡

8. 10 号住居跡

1. 調査区西側土坑群



2. 1号土坑

3. 2号土坑

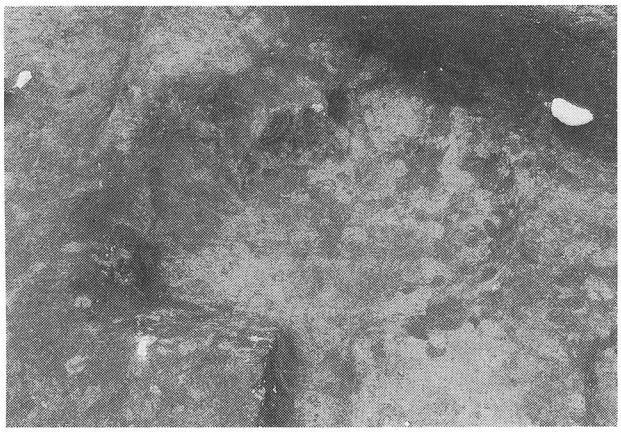
4. 3号土坑

5. 4号土坑

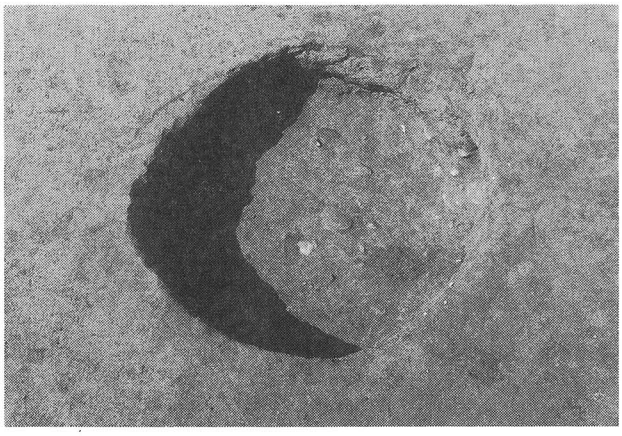
図版 5

1. 5 号土坑

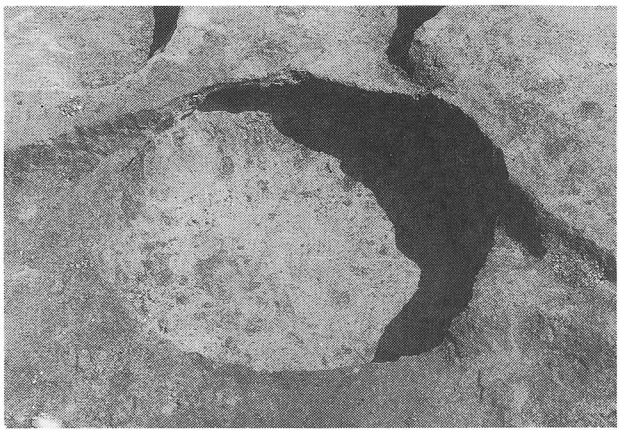
2. 8 号土坑



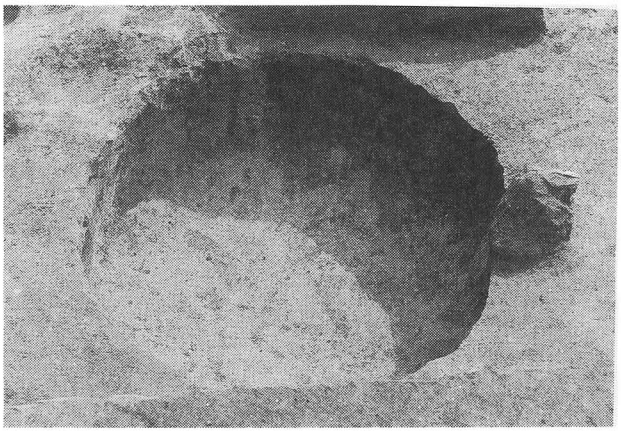
3. 11 号土坑



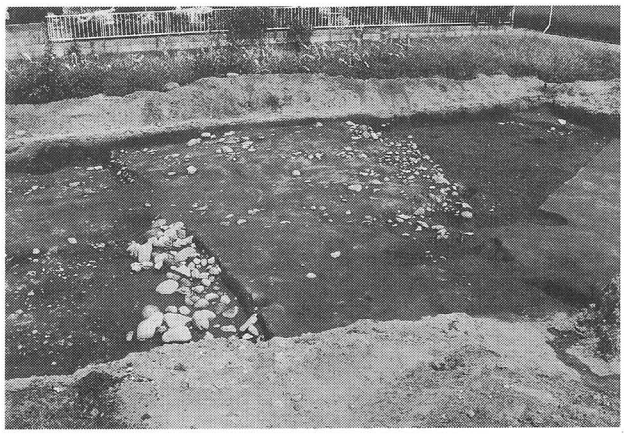
4. 15 号土坑



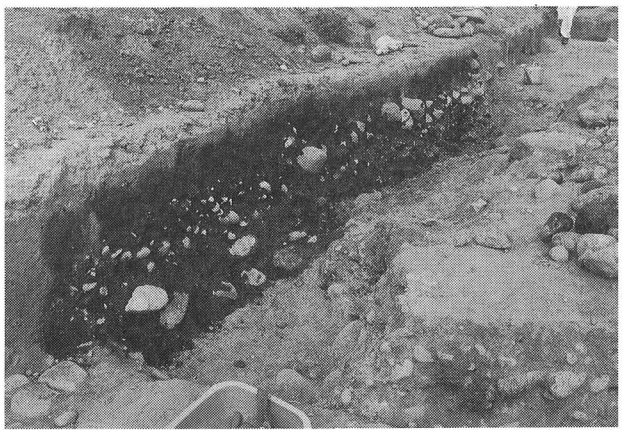
5. 17 号土坑



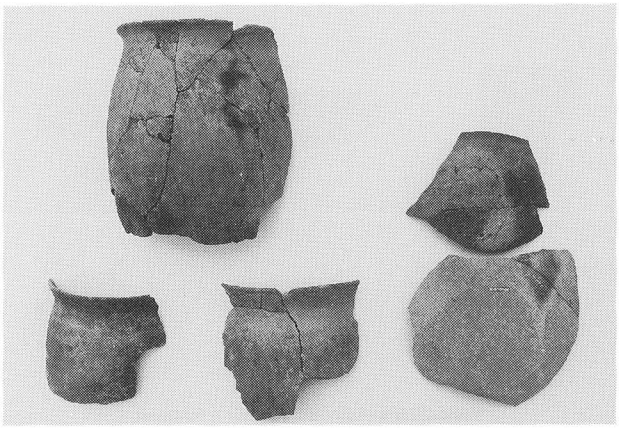
6. 19 号土坑



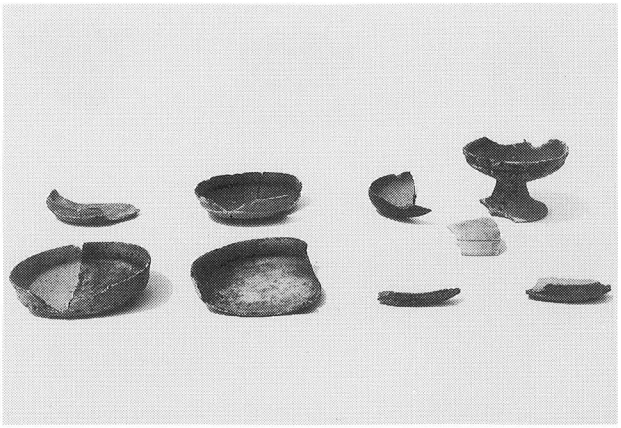
7. 旧河道跡（1）



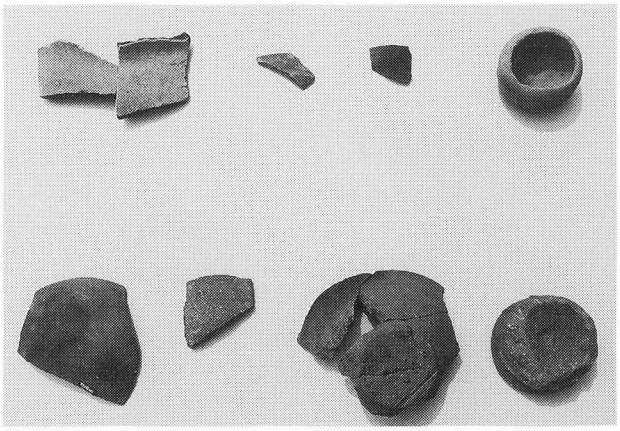
8. 旧河道跡（2）断面



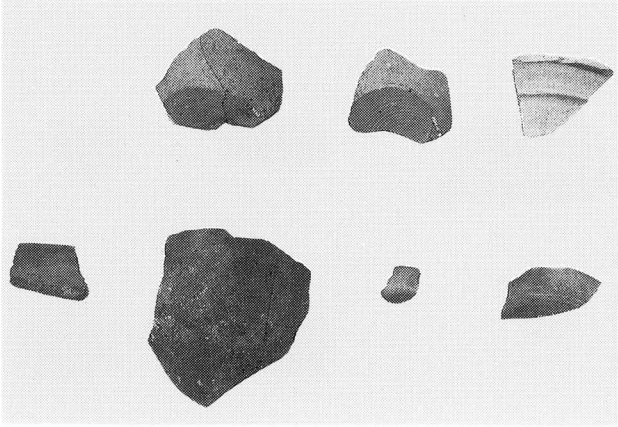
1. 1号住居跡出土遺物（1）



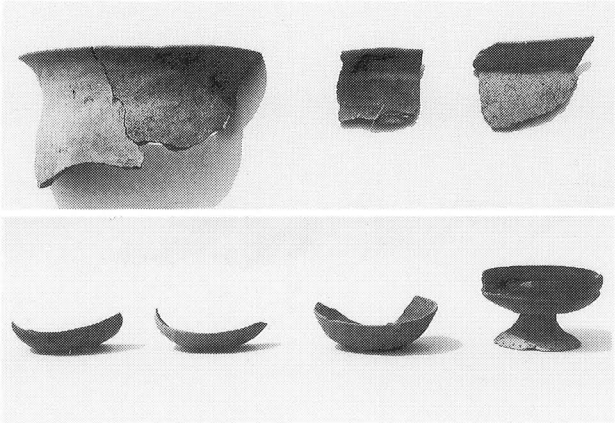
2. 1号住居跡出土遺物（2）



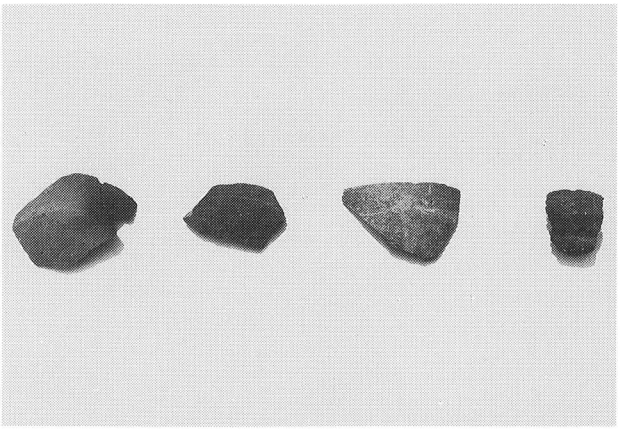
3. 2号住居跡出土遺物



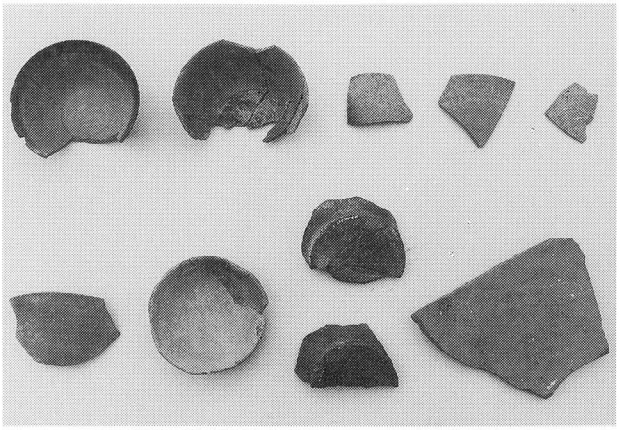
4. 3・4号住居跡出土遺物



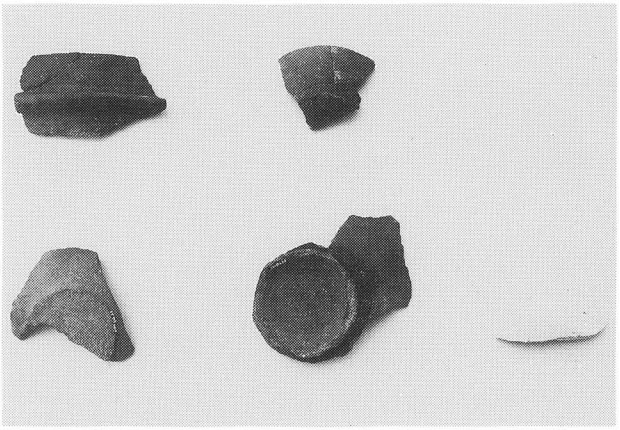
5. 5号住居跡出土遺物（1）



6. 5号住居跡出土遺物（2）

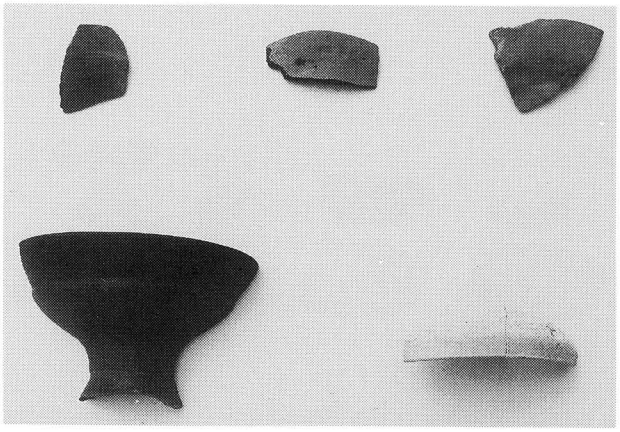


7. 6号住居跡出土遺物

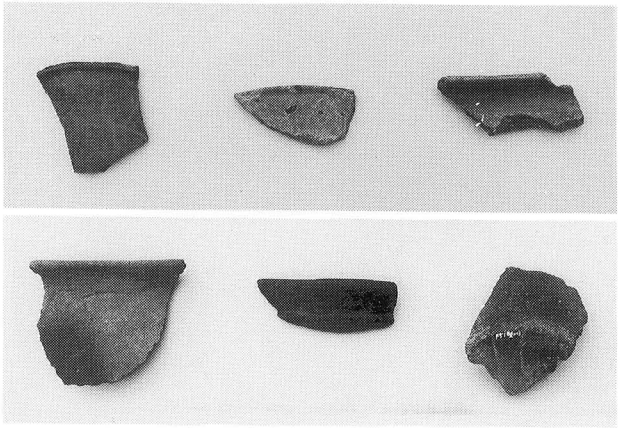


8. 7号住居跡出土遺物

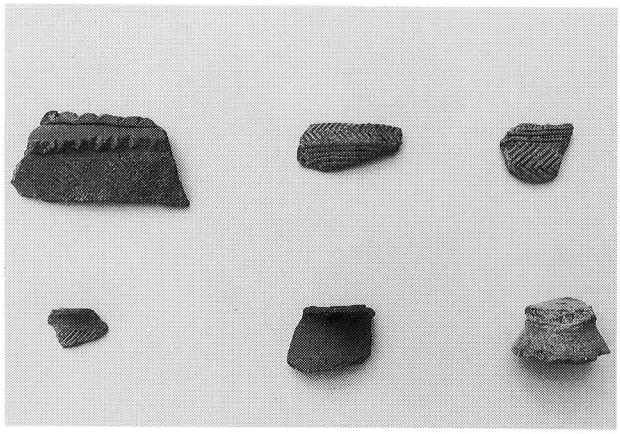
図版 7



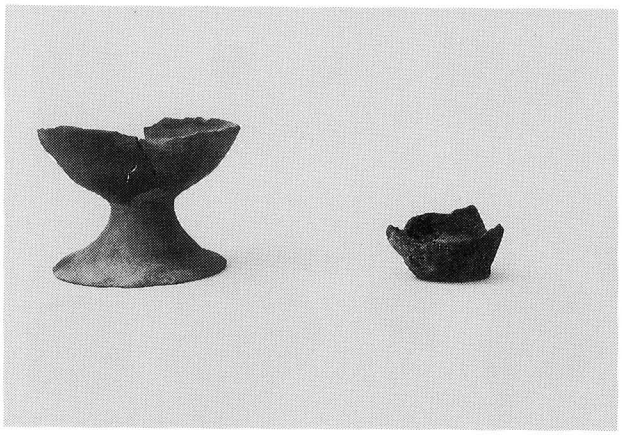
1. 8 号住居跡出土遺物



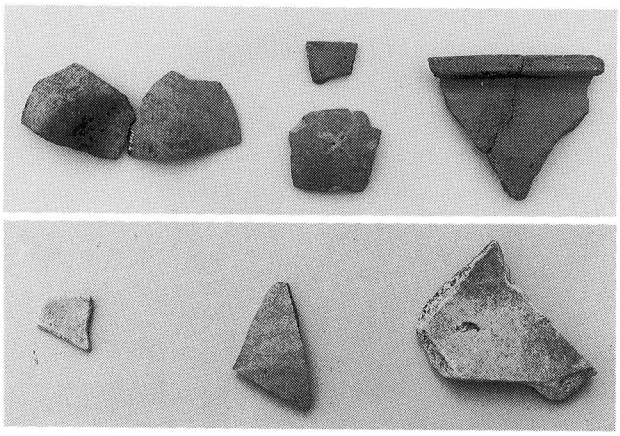
2. 9・10 号住居跡出土遺物



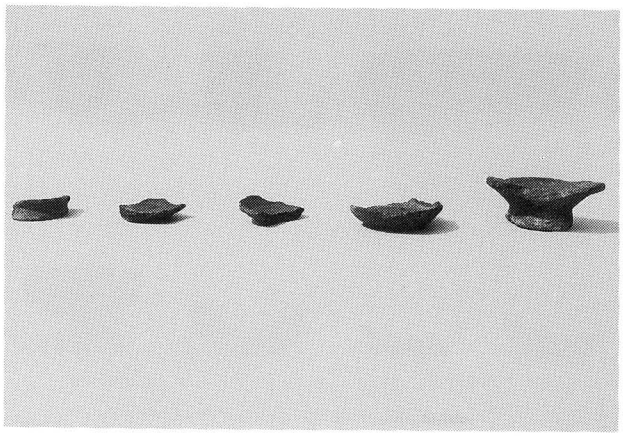
3. 縄文・古墳時代(前期)の土器



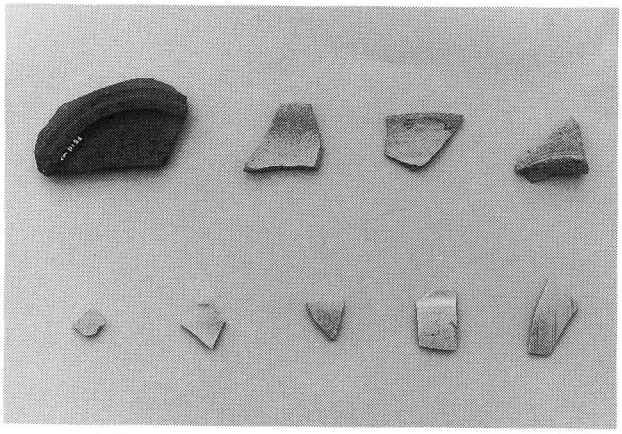
4. 古墳時代(後期)の土器



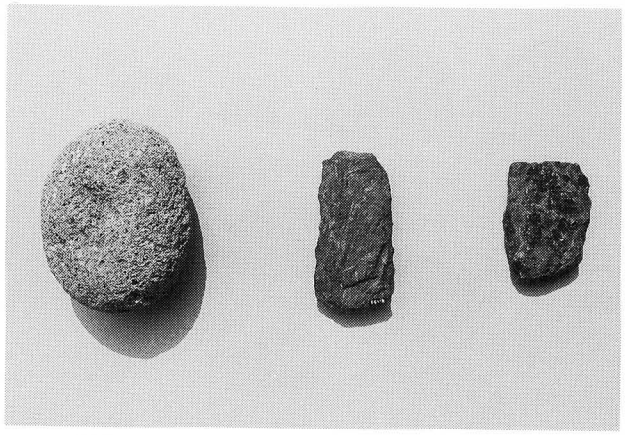
5. 奈良・平安時代の土器・陶器



6. 平安時代末葉の土器



7. 須恵器・灰釉陶器・貿易陶磁器(白磁・青白磁)



8. 遺構外石器

報告書抄録

ふりがな	まつのおいせき
書　　名	松ノ尾遺跡Ⅴ次
副書名	
巻　　次	19
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	小坂 隆司
編集機関	敷島町教育委員会
所　在　地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
発行年月日	平成16年4月20日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まつのおいせき 松ノ尾遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町中下条外	193928	18			平成12年 7月27日～ 平成12年 8月28日	250	マンション 建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松ノ尾遺跡	集落跡	古墳時代 平安時代	住居跡 土坑	縄文土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器	古墳・奈良・平安時代の集落跡。 出土遺物に中国産貿易陶磁器である白磁、青白磁の碗、皿、水注の破片が出土。

敷島町文化財調査報告　第19集
松　ノ　尾　遺　跡　Ⅴ
発行日　2004年(H16)4月20日
発　行　敷島町教育委員会
山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
TEL(055)277－4111
印　刷　㈲協和印刷社